これはテンプレですか？　いいえ、銀のプレートメイル略して銀プレです

さんすべりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
これはテンプレですか？　いいえ、銀のプレートメイル略して銀プレです

【Ｎコード】
Ｎ２０４６Ｚ

【作者名】
さんすべりあ

【あらすじ】
警察官になって、はや2年。毎日あいさつしてくれる女の子に告ったある日、事件現場で殉職しました。　やっぱりあれは死亡フラグだったのか。そうだよな、オレが幸せなんてヘンだもんな。二階級特進バンザイ（泣）。　生まれ変わった先は、いわゆる剣と魔法のファンタジー世界でした。　ホームズ好きの妖精にとり憑かれつつ、めざせ、魔法警官。いや、その前に成長しなくちゃだけど。

プロローグ（前書き）

気楽に書こうテンプレシリーズ第二弾。
もっとも、第一弾とはぜんぜんつながりません。
独立して読めます。
よろしくお願いします。

プロローグ

通勤通学の皆さんが、駅や学校に向かって行き交っている。

そんな中、オレは一日おきに交番の前に立つ。市民を見守るのは、警察官として大切な仕事である。

「見守るっていうか、見てんのは冬ちゃんだよなー？」

先輩がからかうが、オレは固い表情を崩さない。崩れない。崩せない！

手には汗がダラダラ。

緊張で顔は硬直。

……すがすがしい朝日の中、自分が一番不審人物なのは自覚している。

「おう、来たぞ」

先輩が、ドンと背中を押した。よろけるオレに代わり、見張りを勤め始める。

「おはようございます」

いつもと同じ笑顔が目の前にあった。

江上冬さん。天然ぽやぽやの、騙されやすそうな1年生。背が小さいので一見中学生だが、彼女の制服は南東北高校、通称西ナシ高のもの。

しかもオレは平日毎日見ているので、お子様と間違えるはずもない。

ん？　なんで毎日？　非番があるだろって？

甘いな。オレは休みでも朝来ているのだ。彼女の挨拶にはそれだ

けの価値がある！

「お、おはようございます。あ、あの」

ナゼか敬語。しかも返事が上ずってしまう。

「お、お話が……。ち、ちょっとこちらに来てもらえますか」

「え。私、警察に取り調べられるような事しました？」

本人は不思議そうに目を丸くしただけだったが、周りがざわめいた。（えー何なに）（万引き？）（スマホで撮っとくか）など、予想外に不穏な方向へ進んでいく。

まずい。このままでは、オレが冬さんを無実の罪に陥れてしまう！

オレは覚悟を決めた。

「ちちち違うんです。話というのは、つまりですね、ももももしよければ本官と付き合って下さい！」

今度は、おおっとどよめきが上がった。

よし、冤罪回避。

それはいいのだが、告白したのは初めてだ（された事はナイ）。

頭に血が上って、立ちくらみのようにクラクラふらふらしてくる。

もういい。言うだけ言った。我が生涯に一片の悔いナシ。だから、断るなら早くして欲しい。

さすがにここでブッ倒れるのは恥ずかしいので踏ん張っていると、冬さんは困った笑顔になって首をかしげた。

ああ、やっぱりな。

町内おばちゃんたちの噂では彼氏はいないってハナシだったが、

そう上手くいくわけがない。いつでも来い、と覚悟はするが、オレの肩はガックリ落ちていた。

頼むから、優しく断ってくれ。キモイとか言うのなしで。

本気でへこむから。

「あ。違うんです。お巡りさんはいい人だと思います。挨拶してくれますし。ただわたし、よく知らないから、あの、お友達からでいいですか……？」

遠慮がちに訊ねる姿は、地味だが可愛い！

「はい！　では自己紹介をさせていただきますっ。本官は西岡勇太郎といい、現在２０歳。貯金ナシ彼女ナシの不甲斐ない男ですが、剣道は全国大会で入賞の腕前です！　ぜひ冬さんを守らせて欲しいのでありますっ！」

あ、また敬語になってしまった。

しかもあんまり嬉しかったので、彼女がいつも乗る電車が行ってしまったのに気付かなかった。

それでも冬さんは怒らずに慰めてくれた。

少しだけ話をして、携帯の番号とアドレスを教えてくれた。

なんていい子だ。

オレは幸せな気持ちで業務を始め――――

昼に発生した強盗事件で、犯人に撃たれて死んだ。

やっぱり今朝のは死亡フラグだったのか。そうだよな、オレが幸せなんてヘンだもんな。二階級特進バンザイ。しくしく。

さいごに一言。

「なんじゃこりゃあああぁっ（ｂｙ　太陽にほえろ。実物見たことないけど）」

そんで。

転生した。

プロローグ（後書き）

……タイトルの『銀のプレートメイル』にたどり着くまで長いかもです。
できれば、気長にお付き合いいただけると嬉しいです。

1　乳幼児。

そんで。
転生した。

なんか、あの世で閻魔(えんま)大王に会った気がする。
あと、いらないオマケをそのままくっつけられたのは覚えてる。
ラック値の欠けているオレを憐れんで便宜(べんぎ)を図ってくれるなら、オマケじゃなく冬さんをギブ。

……冬さん。もう会えないんだ。
生まれた直後はそれが悲しくて大泣きした。しばらくたってからも男泣きに泣いた。
だって始めて女の子と付き合えそうだったのに。まあ、オトモダチからだったけど。

恋愛理由で泣く赤ん坊ってどんなだよ、と自分でも思うが。
悲しかったんだから仕方がない。

それはともかく、生まれ変わっても現代日本の基礎知識は残っていた。

有効そうなところで、「海外派遣編：井戸の作り方」や「サバイバル」「野草・薬草」。
警察の試験に落ちたら、自衛隊に応募しようと思っていたので読んでいた。

これをチートというのだろう。
剣と魔法のファンタジーな世界でも通用するはず！

――――自分で歩けるまで、死なないでいたらね。

それが目の前の問題。
実は、恋人未満の冬ちゃんと死に分かれたのを泣いている場合じゃないのだ。

オレは生まれてこのかた、満腹するまでミルクをもらった事がない。
母の乳の出がよろしくないのだ。中世ヨーロッパ風の社会では農民の地位がめちゃめちゃ低く、そして父親と母親は完璧な農民デス。

という事で、命の危機。まったり寝ていられないオレは、驚異的なハイハイを身につけた。
「きゃー、マグナスったら何してるの」
姉が叫んでいる。ちっ、見つかったか。
洗濯物を放り出して追いかけてくる姉から逃れるべく、方向転換。藪（やぶ）に隠れて匍匐前進（ほふくぜんしん）なんてしてる余裕はもうない。直線で、目標物【たんぽぽ】！

花をぽくっとやったところで、姉に捕まった。

「食べちゃ駄目っ」
ぺしっと、犬が食べちゃダメな物を食べた時のようにはたかれた。しかし飲み込んで、次はヨモギに手を伸ばす。むしって口に入れようとすると、姉が手を押さえて、拮抗（きっこう）。にらみ合う。

「あー（少量なら、赤ちゃんでも平気だと思うけど）」
「あー、じゃないの！」
「だー（本当はてんぷらにすると美味（うま）いんだけどさ）」
「だー、でもなくて！」

オレは姉の腕の中で、ひょいと態勢を入れ替えた。
柔らかい体は、丸くなるだけで簡単に腕の下へ落ちる。姉はびっくりして手を離したので、ヨモギを飲む。あとはクレソンだな。
川近くまで、高速ハイハイ。
歯がないので前二つは食べにくかったが、これは歯茎ですり潰せた。うん、けっこう平気に食える。

座りこんでもしゃもしゃやっていると、姉が膝を抱えて泣きだした。
「……ごめんね。お腹すいてるのよね。うちが貧乏だから。ごめんね」

「……」
オレはクレソンを摘むと、姉の前に這っていって差し出した。
腹が減ると、大人でも泣きたくなるよな。
「あー（サラダに乗ってるヤツだから）」
鼻をすすりながら顔をあげた姉は、ぱくりと食べてくれた。

2　幼児。

親は朝早くから起きて畑の世話をしているので、子供のオレを育ててくれたのは兄と姉である。うーん、お百姓さんってエライ……というか、たいへんだな。

農業用機械の原理も覚えてくれれば良かったと、後悔。

「……」

よし、後悔終了。

できる事からガンバロウ、って標語もあった気もするし。まずは毎朝飲み水を汲みに行く姉のため、井戸にポンプを取りつけよう。

水汲みは重労働なのだ。

満一歳にしてハイハイを卒業、先日から二足歩行をはじめたオレは、よちよちと井戸に近寄って行った。

「あらマグナス。ケイトはここじゃないわよ」

「あー（知ってる。川にクレソンを取りに行った）」

オレが異常にクレソンに執着するので、このごろ姉は自発的にクレソンを摘みに行ってくれる。塩だけで簡単おひたしになるので、空腹な家族にもギリギリ好評のラインだ。

それにしても、なんでここの人たちって野草食べるの嫌がるのかな？

おかずが一品増えたら嬉しくない？

それはともかく、じーっと井戸を見ていたら、広場が騒がしくなった。

「何があったんだい？」
水を汲んでいたおばさんが、ざわめきの方へ大声をかける。
「イノシシが出たんだってさ。男衆が倒したってよ。今日は焼き肉よーっ」
焼き肉！！
オレは立ち上がると、一生懸命広場へ走った。
まだ頭がでかすぎてバランスがうまく取れず、一歩ごと右へ左へ揺れるのは大目に見て欲しい。

「だー（にーちゃん）」
近付いて行くと、先に来ていた隣のおばさんが抱き上げてくれた。
イノシシ獲ったどーな浮かれ騒ぎだけでなく、もっと切羽つまった動きもある。

「ヨシュアがケガをした！　森の治療師を呼んで来い！」
「木地師が森でケガなんて、他に獣が出たのか？」
「いや、元から体調が悪かったらしい。手負いのイノシシにやられただけだ」
ほっとした空気と緊張が交錯し、慌ただしく何人かが走っていく。

「こんなとこに来て、危ないじゃない。踏まれちまうよ」
「あー（ありがとう）」
オレの気持ちが伝わったのか、おばさんはぐりぐりと頭を撫でてくれた。どういたしまして、と言いながら兄へ近寄る。
「ジョージ、マグナスがおめでとうってさ」

「おう。見ろよ、マグナス。兄ちゃんが獲ってきた、久々の焼き肉だぞ」

兄ちゃんサイコー。
もちろん肉は大好きだ！
きらきら目を輝かせたオレは、盛大なよだれをたらして集まっていた人々に大笑いされた。

「おまえん家の弟、ホント食い意地が張ってるよな。草喰うんだろ？」
「うー（クレソンをばかにするな。整腸作用だってあるんだぞ）！」
「ジョージも狩りに参加したし、ロバートの家のはいいところを切り分けてやれ」
両手を振り回すオレの抗議に笑った村長は、肉を解体しているおじさんに声をかけてくれた。

村長、なんてイイ人なんだ。
いつか恩返しさせていただきます！
オレがきゃっきゃとはしゃいだので、村人はまた大笑いした。

夕食にはもちろん肉が出た。
もちろん付け合わせのクレソンも。

「マグナスのおかげで、いいお肉がもらえて良かったわねえ」
「そうだけどさ。母さん達、そもそもオレが狩りに参加してたからだって、覚えてる？」
「お兄ちゃんって囮（おとり）？」
「それはハル。今年のオレは弓使いだ」

「ほう。当たったのか？」
「もちろん」
珍しく食卓が賑やかだった。
まだ歯のないオレは一かけらをしゃぶるだけだったが、充分に楽しかった。
保存分の肉にハーブと塩をぬって、家族を呆れさせたくらい楽しかった。

肉に浮かれ過ぎてポンプをすっかり忘れていたのは、ベッドに入ってから思い出した。

3　マグナス最初の事件簿１　（一歳半）

木地師のヨシュアがケガをしたと聞いたので、オレは見に行った。
今日も頭が大きくて、歩くたびによちよちと左右に揺れる。ああ情けない。早く人間（おとな）になりたーい。

「おや、お見舞いに来てくれたのかい」
ヨシュアの母親が、ドアを開けようと背伸びしていたオレに気付いて中に入れてくれた。
「あー（大丈夫か？　具合はどうだ？）」

兄と同い年のヨシュアは、床に座りこんだオレを抱え上げてベッドの上に座らせた。
「いてて……。お前、ホントおもしれーなー。うちのアリアなんて、お前より半年早く生まれてんのに家の中這うのが精いっぱいだ」
「むー（それが普通だ。それより、ケガは？）」
答えはなく、頭を撫でられた。
こいつは姉と違って、こっちの言いたい事を分かってくれない。
仕方ないので、足からはじまって肩までぺしぺし叩いてやった。
ヨシュアは太腿（ふとももと腹のところで思い切り顔をしかめた。

ケガはそこか。
シーツを剥いだら、シャツやズボンにまで血がにじんでいた。
特に太腿が問題。うわ、そこ動脈の近くだ。あぶねー。一歩間違ったら、出血多量であの世行きだ。
「……？」
オレは腹側の、血と共ににじんでいた膿（うみに鼻を近づけた。

傷は小さいが、スゴイ臭いだった。
太腿はまだ膿んでないのに。
たった一日でこんなに酷(ひど)くなるはずがない

＊

「……」
オレは薬になる草を探して村の囲いの外へ出た。
目当ての白い花はすぐ近くに咲いていたが、不幸にして背が届かない。まったく、全然、背伸びとかジャンプとかも無理。論外。
なので、オレは今のオレにできる手っ取り早い方法をとってみた。
つまり。
号泣。
びえぇぇぇ――――――――――――っと泣く。肺活量限界まで、泣き叫ぶ。
やがて、声を聞きつけた姉が走ってきた。
「マグナス！」
「うー（ごめんな姉ちゃん）」
「……」
けろりと泣きやんだオレは、木の幹にしがみついて叩いた。
「……登りたいのね？」
うなずく。
姉は、あきらめの境地で枝に乗せてくれた。幸い体重が軽いので、枝の先まで行ってもしなる程度だ。オレは一塊りになって咲いている花を採り、姉の肩に降りた。
「また食べるの？」

首を振る。
「あら珍しい。じゃあ、どうするの？」
「あー」と、オレは肩車のまま家を指さした。

走ろうとして、転んだ。
この使いにくい体、どうにかならないかな。

普通のこどもなら大泣きするところを、オレは腹をたてつつ起きてぺちぺち鍋を叩く。
もはや一歳児とも思えぬ奇行に慣れた姉は、鍋に水を入れて暖炉の火を起こしてくれた。
「やっぱり食べるんじゃない」
「うー」と首を振る。その間も、瓶をとってきて姉に渡す。

「……洗うのね？」
ため息をつかれた。

気にするなって。物分かりのいい姉を持って、オレは幸せだ。

4　マグナス最初の事件簿２　（一歳半）

助手（あね）を最大限に活用して、瓶を熱湯消毒し、採ってきた花をつっこんだ。家にあったミントも。

その上で、瓶に炭酸水を注ぐ。

本当はアルコールと蜂蜜も入れたかったが、高いので無理。

ちなみに炭酸水は、山のふもとまで行くと汲める天然物である。温かかったら炭酸温泉になれるのに、残念ながら冷たくて入れない。胃腸病に効くので、どこの家でも汲み置きがある。

「食べるんじゃなくて、飲むの？」

「ぶー（よっぽどオレって食いしん坊のイメージ？）」

オレは一度頷き、それから首を振った。ああ、めんどくさい。明日から発声練習でもしようかな。

今からでも普通にしゃべれると思うけど、家族や村人に慣れてもらわないといけないし。

「あー（とりあえず、片付けて）」

瓶詰の白い花――アンゼリカという――にフタをし、オレは姉を見上げて棚を指さした。

「はいはい」

心得た姉は、埃のない場所にかたづけてくれた。

「で？」

「う（終わり。ありがとう）」

ぺこりと一礼すると、腰に両手をあてて偉そうだった姉が笑いだした。一歳児が手を揃えておじぎするのが、彼女のツボらしい。

……アンゼリカの薬ができあがるのは、早くて明日だ。
暇ができて、オレは考える。
こうして姉の家事を邪魔するのは良くない……あ。そうだよ、だから井戸にポンプつけようと思ったんだ。忘れてた。

オレは姉のスカートを引き、外に出た。地面に図面を書くと、姉が上からのぞき込む。
「なんの絵？」
オレは井戸を指さした。
それから図面の取っ手部分を示し、ゼスチャーしてみる。図面の口から水が出るのも描き加える。
「……水が、出るの？」

さすが姉ちゃん、これだけでよく分かったな！

オレは拍手したが、姉の顔色は悪かった。
真剣に肩に手を置かれた。なに、一歳児にマジ説教ですか？
「マグナス、みんなで使う物にいたずらしちゃダメよ。いいえ、いたずらどころじゃないわ。そんなの見つかったら、教会になんて言われるか。異端者だと思われたら殺されるのよ。いい？　絶対にこんなの描いちゃダメ」

……え？　ええっ？

なにそれ科学ダメって事？　魔女狩り逆バージョン？
ぎゃー、いやだー。まだ子供だし、ろくな抵抗もできないぞ。
怖くなったオレは、カクカクと何度もうなずいた。
姉の手伝いは、他の事でしよう。それに考えたら、真空状態にできるだけの技術がオレに無かったしな。

で、次の日。
「こんにちはー」
「まあ、今度はケイトかい。ヨシュアのために悪いねえ」
「いいえ、昨日はうちのチビが勝手にお邪魔しちゃって、こっちこそごめんさない。それで、これ、差し入れしてもいいかしら」
姉は、アンゼリカの瓶詰を差し出した。
「なんだい？」
「『魔女の霊薬』っていうんですって。魔を退(しりぞ)けて、病気を治すお薬」

仰々（ぎょうぎょう）しい名前に、おばさんが目を丸くした。
「なんだってそんな物。治療師でさえくれなかったのに」
「マグナスが」
おばさんの視線が、スカートの影になっていたオレへと降ってきた。

微妙な沈黙。

「大丈夫。塗り薬とかじゃなく、飲み物なんですって。あたしも飲んでみたけど、美味しかったわ」
「ああ！　飲み物か、なるほどね！」
一気に明るくなったおばさんは、木製コップを持って来てくれた。もちろんヨシュア作だ。
……疑われたり怖がられなかったのはいいんだけど、ナニこの落差。なんでオレ、食糧ネタだと大笑いされんだ？

5　マグナス最初の事件簿３　（一歳半）

ヨシュアは、まだベッドで寝ていた。
昨日より膿の臭いが強くなっている。

オレはベッドに、よじよじとよじ登った。おばさんがヨシュアが身を起こすのを手伝い、姉がアンゼリカ抽出液を入れたコップを差し出す。
止血・鎮痛（いたみどめ）・抗炎症（はれをなおす）などの効果があるので、飲まないよりマシだ。

これでオレのチート能力が物質生成なら、いくらでも即効の現代的医薬品が作れるのだが、あいにくそんな気配はどこにもない。
これでガマンしてもらおう。

ちなみにナゼこんな知識があるのかといえば、警察で勉強させられたオマケである。
あれはあれで面白かった。
一クラス分の警官が集められて勉強するのだが、基本、一蓮托生。一人落ちたら、みな追試。なので嫌でも結束する。その必要もないのに、全員でアタマを坊主に剃り合って笑い合った。
オトコの友情、昭和篇じゃないよ？
はーとうぉーみんぐな職業系ひゅーまんどらま。

というわけで、この世界でだったら暗黒社会（マフィア）で暗躍できるくらいに麻薬覚醒剤その他を知ってる。
コカインはもともと植物の抽出物で、現地人の滋養強壮のお茶だった。クスリと薬は紙一重。そんなところから、植物方向も暗記している。

自分で言うのもなんだが、オレが警官志向の人間でよかったと思うよ。

それはさておき、ここまで膿がひどいとちょっとなー。
この村だと、酒場に行ったって高濃度のアルコールなんて無いし、どうするか。

シーツを剥いで座りこんだオレは、シャツをめくって腹の傷の前で腕組みした。
腕組みする一歳児って……いや、今はそんな事いってる場合じゃないのだ。

始めて傷を見た姉は小さく悲鳴を上げ、おばさんは沈痛にうつむいている。村人の死因はだいたい病気かケガで、この手の傷が元で命を落とすのを、大人は皆知っている。

「あー」
「マグナス？」
「いー、うー。えー、びー、しー、でー」
発声練習をしたオレは、子供特有の甲高い声にびっくりした。うわーウィーン少年合唱団。この世界にないけど。

「あーあーあー」
「マグナス、ちょっと」
姉が慌ててオレを抱えて出ようとするが、オレはびしりと片手を立ててストップをかけた。もはや一歳児の域を越えているが、だって放っておいてヨシュアが死ぬの嫌だし。

つか、姉、今すぐ椅子に座って寝てくれないかな。
メガネな少年探偵・湖南みたいに副音声でお送りできるのに。

「「「「……」」」「あーう？」
純粋に幼児なアリア以外の無言が落ちた。

実はちょっと期待したのだが、姉が寝てくれなかったので、オレはさっさと諦めた。
「ワタシは紙です。この子の口を借りて騙(かた)りましょう」

「な、なに突然」
ずささささっと、姉とおばさんは抱き合って壁際に張りついた。
ヨシュアも冷や汗をダラダラ流している。

いいよ別に信じなくても。
建前が欲しかっただけだし。

「傷は治せマス。あなたが正直に告白するなら。太腿(ふともも)の傷はイノシシ退治でできたものデスが、この腹のは違いマスね」
おばさんが息をのんだ。知らなかったんですか、ふーん、ヨシュアは家族にも隠してた、と。
「いつ、どこで、誰にやられマシたか」

「……先週の土曜日に、森で。誰かは分からない、いえ、分かりません」
敬語になるなんて、信じたの？　オレの紙サマ。

それはさておき、土曜日は安息日。教会からの通達で、仕事をしちゃいけない日になっている。
隠すんだから、ヨシュアは森で木工の仕事してたんだな。

「大丈夫、言いマセン」

逆魔女狩りしてる教会に、禁を破ったなんて知られたら怖すぎる。

それに、ヨシュアを殺しかけた犯人ってうちの兄（ジョージ）だよ！！

何してんだ兄ちゃん！

オレは腐っても元警官だ。焼き肉の誘惑があっても肉親でも、涙をのんで告発するぞ。

小さな傷は、膿んで崩れて形が分からないが、広く斬られていないのだけは確かだ。残るは、刺すか、突くか――――射るか。

兄は森で弓の練習してたし。

慣れてる他の弓使いがうっかりするとも思えない。

「答えてくれて、ありがとう。おかげで犯人が分かりマシタ。ジョージです。後で謝罪に寄こしますが、示談で済ませてもらえると助かりマス」

言った瞬間。

ぽんっ、と煙が湧いた。

『事件解決おめでとうございます！　お久しぶりです、マスター！』

帽子のかわりに小さなティアラ。ドレスの上にインヴァネスコートを羽織り、右手にパイプ。
金キラの髪を頭の横で二つに結び。
きわめつけは背中の羽。

もはや何からツッコんでいいのか分からない、手のひらサイズの妖精がオレの鼻先に現れた。
ホームズ好きのフェアリープリンセス。
これが闇魔大王が、前の世界から引き続き（特別に？　面白がって？）くっつけてくれたオマケである。

あぜんとする姉たち。

だろうな。オレだって死ぬ前の世界でコレに出て来られた時には、自分の正気を疑った。

『きゃあ。マスターったら、かっわいいー。こんな小さくなっちゃってー』
「可愛いとか言うな。それより、解決したからな。願いは、ヨシュアの傷を治すこと」
『うわーん。一年以上会えなかったのに、マスターが冷たーい』
「冷たいのは室内からの視線！　さっさとする！」

はーい、と頬を膨らませた妖精は、ぱちんと指を鳴らした。

音と共に、本人(ようせい)と傷が消えた。

残されたのは、呆然とする姉とおばさん、全身すり傷一つなくなったヨシュア。

オレはといえば、知識以外のチートがこんなだったのを嘆くだけ。

……あ、紙サマの演技わすれてた。

ま、いいか。

そんなの気にしてる人、誰もいないしな。

6　ホームズ好きの妖精って一体……。

思い出したくもないが、妖精との出会いは死ぬ前の現代ニッポン、警官として初手柄の時だった。

「三島東里（みしまとうり）、２２時１８分、強盗の現行犯で逮捕する」

数カ月続いた連続強盗の犯人を、ぎりぎり間に合って捕まえた。

犯人も犯行も予想できてはいたが、まだ新米で、自分の考えに自信がなかった頃だ。

あまりに自信がなさすぎて、上司どころか面倒を見てくれる先輩にすら言えなかった。トイレに行くふりでこそっと抜けて、一人で行ったら、本当に出くわしてしまったという間抜けっぷり。

（うわーどうしよ。おーこーらーれーるー）

何事もなかったら「長かったな」「下痢です」で済むが、これは。

なので、犯人は少し驚いてかかって来たが、オレはそれ以上に驚いていた。

条件反射で取り押さえたのはいいものの、頭の中はマッシロ。

言うべき事や手順もすべて忘れた。

被害店舗で、粘着テープで巻かれた従業員と、とりあえず手錠だけはかけた犯人を前に、ただひたすらマニュアルを思い出そうと頑張っていたんだから、我ながらどうしようもない。

「……あんた一人だよな。こういうの、許可されてねーよな。無効

じゃね？」
そんなだったので、犯人にまで揺さぶりをかけられる始末。
「え、いや、現行犯だから大丈夫。そのはず。他の、今までの分は、取り調べで分かるはずだし」
汗だくビクビクで挙動不審に言う姿は、犯人より怪しかったと思う。

「他のなんて知らねーな。つか、三島ってダレ」
「お前だろっ！　言い逃れようとしても、ムダだ。オレが思うに……」
自信のないまま手口や潜伏方法などを説明していたのも、思い直すと恥ずかしい。二時間サスペンスじゃないんだから、ありえない。

オレは船越○一郎か？
ここは東尋坊（とうじんぼう）か！？　（↑海に突き出た“ざっぱーん”な崖）
勝手に突っ走った事もふくめ、イレギュラーばかりである。

そんな赤っ恥な説明を終えた時だった。

ぽんっ、と妖精が目の前に湧いて出た。

『きゃー本物ホンモノ！　名探偵見ーつけたっ』

「……」
「……」
その時の犯人といったら、表現しようのないキョトン顔だった。

いい歳した男のするもんじゃない。――――もちろんオレも同じ表情をしてたけど。

だが、ある意味当然だと思う。

だって、手のひらサイズの女の子　（羽つき）ってだけでもおかしいのに、その服装がドレスにインヴァネスコート。片手にパイプ（しかも空（から）。刻みタバコは入っていない）。

ホームズファンの勘違いコスプレ？

それとも妖精的には正しいのか？？

それ以前に、妖精っているんだな……。まずそこからビックリだよ。

『ステキ！　ねえ貴方（あなた）、私のマスターに任命してあげる。貴方が一つ事件を解決するたびに、願いを一つ叶えてあげるの。嬉しいでしょ？　どう、何か欲しい物とかある？　私ができる範囲で言ってみて』

「消えろ」

白昼夢を見ているヒマはない。

犯人をしょっ引かなければならないのだ。

オレは目をつぶって頭を振る。次に目を開けた時には、妖精は消えていた。

「ふっ。この状況で夢みるなんて、オレも余裕だな」

強がって棒読みで笑うと、

「……夢、か？」

ぼそりと犯人が訊いた。

抵抗する気をなくした犯人と帰ったオレは、署内の全員に本気で怒られ始末書を書かされた。
職務規定に反したのだから、仕方ない。
それは反省する。諦める。諦められる。

――――諦められないのは、あのとき妖精に「消えろ」と「願って」しまった事だ。

願いは叶えられ、契約は成った。
オレは不本意ながら、完璧にとり憑かれてしまった。

死んでからも契約は消えず。
そして今に至る。

ところで、一言いいか？
オレ、警官であって、探偵じゃないんだけど。
どうしてあのフェアリープリンセスは、根本的なところでいい加減なんだろう。

7　vs. 森の治療師　1　（一歳半）（前書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます！
前作にくらべアクセス数、お気に入り数が増えてて驚愕。
感謝です！

7　vs．森の治療師　1　（一歳半）

兄ジョージは、自分の弓練習がヨシュアにケガをさせ、イノシシに引っかけられる原因になったと知って真っ青になった。

しかもケガをさせたのが安息日。

「安息日とは、かつて魔人の奴隷となっていたヒトが勇者に率いられ、6日間の反乱の末に勝利した史事に由来するのじゃ。勝利の7日目を、労働から解放された聖なる日と定めて祝福する」

ケガの根本原因が明らかになったため、村長が説教をしている。

「あ～（どこの聖書バナシだよ。どんだけ伝言ゲームしたら、こんなに曲がるんだよ）」

ツッコミを入れたいが、ここで紙サマを演(や)ると後が面倒なので、幼児語続行中だ。

「今は教会の戒律も緩(ゆる)くなり、労働をしてはいけないとされているだけになったが、本来は家事すら行ってはならない日だった。そんな日に仕事をし、弓の練習をするなど言語道断」

うーわー。今で緩いの？

魔女狩りされると脅された身では、信じられない。

オレは聞いているのも嫌になって、広場で聞いている人々の輪から抜けだそうとした。

が、姉に襟首をつかまれて引き戻される。

「うー（はーなーせー）」
「ダメよ。殺されたくなかったら、ちゃんと聞いておきなさい。街に行かないと教会がなくて、村でこういう常識を教えてもらえる機会は少ないんだから」
「むー（そんな常識いやだー）」

ジタバタしていたら、いつの間にか説教がやんでいた。

あ。そんなにうるさかった？
逃亡はやめないが、他人の迷惑になるのはよくない。慌てて黙ったが、原因はオレじゃなかった。

場は緊迫する一方。

細い体を黒の服で包んだ、地面まで伸びた白髪の老婆が、杖をついて広場へと歩いて来ていた。

おとぎ話そのまんま。
あるいは学芸会。
治療師だ、と誰かがささやいたが、言われなくても一目で分かる。
お約束としては、こういうお婆さんにこき使われている可愛い女の子がいるはずなのだが、残念ながら見当たらない。

治療師は広場に集まっている村人を見回した。
「教会が認めた医者や治療師以外に、治療行為にかかわってはならない。お前ら、知っておろう」
しわがれた声も、細められた目も、いかにもヘンクツ。
ついでに老婆の言いたい事を理解して、オレはさっき逃げられな

かったのを悔(くや)んだ。

「『魔女の霊薬』を作ったのは、お前か」

老婆は姉を見たが、村人の（かわいそうに）という視線が全員オレに向かっていたので、オレの前に立った。

「こっちだと！？」

なんか文句あるか。

「まだ赤子ではないか」

「おー（いえーす）」

すっとぼけて、何も分からない子供らしく、かわいらしい演技で手足を動かしたのだが無意味だった。

「まあ、いい。それが本当ならたいしたもんだ。罰は与えないでおくよ。だからこっちに来な。アタシが引き取って育ててやろう。何といっても、この周辺には他に治療師がいないからね。後継ぎが必要なんだ」

ちょっと待て。人の将来を勝手に決めるな。

せめて考える時間をぷりーず。

連れて行こうとした老婆の手をかわし、オレは右へ左へコロンコロンと転がった。追いかける老婆。フェイントを織り交ぜて逃げるオレ。

「このっ」

「あー」ころん。

「待てっ」

「うー」ころん。

「待てと言っておるだろうがっ！」

目の前の地面に、雷撃がドッカンと落ちた。待てコラばーちゃん、子供に魔法攻撃するなよ！

「エルドハムにこの人ありと言われたアタシを、本気で怒らせるんじゃないよ。さっさとおいで」

ナニその悪人なセリフ。

人さらいは許さんぞ。被害者が自分なら尚更(なおさら)だ。

「らー！」

オレは聞いたままの呪文(おと)を繰り返し、空をさした指を振り下ろした。

ぴりっ

と、雷Ｌｖ０．２くらいのが降ってきた。ほとんど静電気。老婆の髪の毛が逆立っただけ。

つっかえねー！

オレは敗色を悟るとすぐに転がった。

予想通り、今までいた場所に雷撃どっかん（再）。

あっちはＬｖ３くらいか。当たっても死なないが、般若な形相で髪の毛逆立ててやられると、かなりコワイ（いや、髪の毛に関してはオレが原因だけど）。

ころん。どっかん。ころん。どっかん。ころん……

先に息を切らしたのは相手だった。

ふっ、一歳児をあなどるな。

悪役風にニヤリとし、調子に乗ったオレは老婆の足にタックルをかました。

尻もちをついた治療師は杖でオレを殴ろうとしたが、その頃にはターボ付き匍匐前進で離脱完了。

勝った。

8　vs．森の治療師　2　（一歳半）

対戦カード：オレ対治療師は、オレの素早さ勝ちで終わった。

息を切らせた老婆はさておき、周囲では、村の人たちが何やら遠巻きにこっちを見ていた。

「あー（どの辺が問題）？」

ぺたんと地面に座り込んだオレが首をかしげると、

「マグナス！　魔法なんて教えてないのにどうして。ケイトお前かい」

走ってきた母がオレを抱き上げ、抱きしめた。

「うー（姉ちゃんは関係ない。治療師のばーちゃんがやってたのをマネしただけ）」

姉が通訳すると、村人に微妙な空気が広がった。

忌避ではない。

もう少し複雑で、（うちの村だから仕方ないか）とか（そういうのも有るかもな）とか、そんな雰囲気。

なんですか、実はここ魔法使いの隠れ里ですか。

反対側に首をかしげて母と姉を交互に見ると、二人は揃って村長を振り返った。

ヤギみたいな白ひげの村長はうなずいた。

「ここは中興（ちゅうこう）の祖ガウリュディケを助けたアルフの故郷エルドハム。他に比べれば、魔法の素地はある。お前たちも自身で知っておるだ

ろう。この程度なら問題はない」

説明され太鼓判を押されて、安心が広がった。

話の流れからいって、アルフってのはこの村の出身の大魔道師なんだろう。

彼は（たぶん）王様のガウリュディケを補佐して国をまとめた。で、実は他の村人も多かれ少なかれ魔法の素質がある。

ショーゲキの事実である。

郷土の誇りじゃないか。そんな凄い人がいたなら、寝物語に聞かせようよ。

そう思ったが、オレ以外にも不思議そうな顔をしている子供もいて、あまり大っぴらに語られるものではないのだと察した。

ふうん、と考えていると、少しばかり忘れかけていた治療師が汚れを払って立ち上がった。

「アルフがなんぼのもんかね。必要なのは大昔の魔道師じゃなく、生きてる治療師じゃないのかね。その治療師が村の将来を心配してやってるってのに！　お前たちは何にも分かってないね！　いいよ、こんな乱暴な子、頼まれても仕込んでやらないよっ。教会にも言っとくから、覚悟しな」

老婆は怒って去りかけたが、姉が立ちふさがった。

「待って下さい。あたしじゃダメですか。マグナスの姉です。この子の言いたい事も分かるし、ヨシュアにあげた霊薬作りも手伝いました」

うわ、なんでいきなり姉ちゃんが。
「うー（なりたいの？　手に職つける気？　そうじゃないなら、庇われても困る）」
「庇うわけじゃなくて」

でもきっと、積極的にやりたい仕事じゃないんだろうな。森に引きこもって薬草探しと薬作りって、おしゃべり好きな女の子にはキツイはず。

それにオレは、治療師がいやなわけじゃない。村に必要ならやってもいい。
ただ、向き不向きってあると思う。オレは治療師になった未来を想像する。

成功例：知識を総動員して、画期的治療法を確立。村を一大医療センターにしちゃう。ＪＩＮＮＮ。
成功例別バージョン：過疎地をささえる医療系ヒューマンドラマ。自転車こいで往診しよう。
どっちも悪くないけど、唯一にして最大の問題がある。

実はオレ、器用じゃない。
器用じゃない外科医って、患者にとって悪夢だよな？

失敗例：患者を救えなくてへこんで、立ち直れずにアル中へ。
悲惨だ。でもありそう。成功例よりよっぽどありそう。

オレが想像している間村人たちは不安げにざわめいていたが、村長が咳払いをすると静かになった。

「治療師よ、しばらく待ってもらえんかな。その子はまだ一歳じゃ。洗礼すら受けておらん。祝福を受けてから決めても、充分間に合うだろうて」

老婆はオレを見おろした。

ふん、と鼻を鳴らす。

「祝福なら、この子供はすでに持っておる。教会に寄らず祝福を受けていると知られては、ますます厄介じゃな」

「なんだと……」

一度おさまったざわめきが、さっきの倍になって復活した。

「それは……困った。霊眼の治療師が言うのなら事実。これで教会に行ったら、異端を疑われるか」

あれ？　異端って、科学じゃないの？

オレがスカートの裾を引っ張ると、姉はしゃがみこんで答えてくれた。

「教会の教え以外のものは、全部異端なのよ。他の神や……妖精も」

「許されるのは精霊や天使くらいだな」

お見通しだと言わんばかりの老婆が追い打ちをかけた。

「うー（……降参）」

がっくり頭を垂れ、それからオレは気がついた。

「おー（ちょっと待て。霊眼の人って、あちこちにいるもの？　街の教会にも？）」

「いないね」

姉が通訳し、老婆が不機嫌に答えた。

ひっかからなかったか、と舌打ちが聞こえました。ばーちゃん、

アンタなんて意地悪な。

「よかった、マグナス。気付かれないって事よね？　これで他の子と同じように洗礼を受けられるわ」

ほっとする家族。

……良かったけどさ、「あー」や「うー」だけで通訳できる姉もおかしいって、なんで誰も思わないの？　オレはそっちの方が気になるよ。

まあ、姉は洗礼済みだから、実は霊耳（なんてのがあるかどうか知らないけど）でも問題ないんだろうけどね。

8　vs. 森の治療師　2　（一歳半）（後書き）

次回、妖精ふたたび。

9　森には死体が落ちている　1　（三歳）

自分の足で歩けるようになって、食材集めがワンランクアップした。

身近な野草ではなく、ちゃんとした山菜が採れるようになったのだ！

というわけで、オレは現在フキノトウとタラの芽、フキを採っている真っ最中である。

うーん、我ながらシブイ。

子供の食うもんじゃない。

でもね、前の二つはてんぷらにすると美味しいし（味付けは塩）、フキは砂糖漬けにするという手がある。

暖炉（かまど）の低い位置にオレ用の棒を取り付けてもらったので、めんどくさい下処理から揚げ物・煮物まで、姉を煩（わずら）わせずに作れるのがイイ。

ちなみにどの植物もこっち固有の呼び名があるし、植生もちょっと違う。

オレがフキノトウと呼んでいるのは、アステリデスという名前。

もちろん誰も食べない。

でも食えるし。味変わらないし。基本部分が一緒なんだから、問題ナシ。

オレはまた一つ、雪をかぶったフキノトウを摘んだ。

山にはまだ雪がうっすら残っている。
指先が赤くなっているので、息を吹きかけて暖める。

村は相変わらず貧乏で、うちも貧乏である。
謝肉祭で保存肉を使い果たしたので、今の食生活は極貧だ。

魔法の素質があるなら、もっとやりようがあると思うのに、こんな生活に甘んじている。

科学は異端でも、魔法は教会認定である。
だったら好きに使えるはずなのに、村人はあまり使わない。

どうして？　と訊いたら、「怖いから」と姉は答えた。

暴走が、だろうか？
練習して安定させればいいと思うのだが、そうではないらしい。

もう少し大人になったら村長が話すから、と言われた。

でも、オレが静電気な雷撃を放つのは止められていない。
苦笑されつつ受け入れられている。
よく分からない感覚だ。

「まぐなす。これは？」

ついてきたアリアが、適当な葉をちぎって見せる。
「それは取らずにおいとこうな。夏になったらラズベリーがなるん

だけど、葉っぱがないと大きくなれない」

そうだ。春になったら、他の子供たちも連れてベリー摘みを企画しよう。

そのまま食べられるから、山菜と違ってウケるはずだ。

そんな事を考えながら山を歩いていたら。

雪に埋もれた死体があった。

びみゃ――――っと泣きだしたアリアの手を引いて、オレは一番近い家へと急いだ。

二足歩行はできても、走るのはまだ苦手だ。

「レディ・ワトソン」

『きゃあ、嬉しい。マスターが呼んでくれたー』

ぽんっと現れたのは、頭にティアラを乗せ、ドレスの上にインヴァネスコートを羽織った妖精だ。

オレの肩にちょこんと乗っているので、高い位置で二つに結った金の髪が、歩調にあわせて大きく揺れている。

『あのね、思うんだけどね、もうちょっと頻繁に呼んでくれなきゃ寂しいの。他の妖精なんて人間界に入り浸りで帰ってこなかったりするのに、この頃のマスターって、ぜんぜん頼ってくれないんだも

ん』

それはアナタが事件つながりの契約をしたからデス。
もう警官じゃない、しかも子供にどーしろってんだ。

思いはしたが、ムダ口は後にする。

「死体があった」
『うんうん。見たわー。クマさんにやられたのとは違ったわねー』

上機嫌なフェアリープリンセスは、首をひねって後ろを振り返る。

「解決する前に探偵(オレ)が死んだらまずいよな？　近くに人がいないか探ってくれないか」
『まかせて』

透明な羽を広げて宙へと舞った妖精は、魔法が当たり前の世界でさえキレイだった。

思わず足を止め見送って、はっとする。
アリアの手を引いて、オレはできるだけ急いで歩き出した。

目的の家は、そう遠くない。

「いませんかー」
オレはその家の扉をドンドン叩いた。

「うるさい子供だねえ」

落ちる雷撃Ｌｖ３。

もはやお約束な出迎えをしたのは――――治療師の老婆だった。

9　森には死体が落ちている　1　（三歳）（後書き）

お忘れかも知れませんが、アリアは、怪我をしていたヨシュアの妹です。
マグナスより半年早く生まれてますが、歳は一緒で三歳。

１０　森には死体が落ちている　２　（三歳）

アリアを連れていたので、攻撃をよけられなかった。
手を離し、巻きこまないようにするだけで時間切れだった。
髪を逆立てて通電をガマンしたオレを、治療師の老婆は鼻でせせら笑った。
「今度は逃げなかったのかい。子供のくせに女を庇（かば）うなんて、見上げた根性だね。いいよ、お入り」
その時だった。
『マスターマスター、近くに人、発見ー』
急降下で降りてきた妖精は、オレと老婆の間でホバリング。右手でパイプ（空（から））をくゆらせるポーズをしつつ、左手で指をさした。
『この人です！』
「……うん。ありがとう」
オレはポンと自分の肩を叩いた。頬を膨らませた妖精が、ちょこんとそこに座る。
『感謝の念が足りません』
「細かい事気にすると、大きくなれないんだぞ」
『ひどーい』
老婆はあっけにとられた。

それから妖精をつつこうと、人差し指を突き出す。
……かぷっと噛まれた。

「痛っ、主に似て行儀がなってないね！　それにしても、こんな間抜けな祝福、初めて見たよ！」
手を振って振り落とす老婆。
落とされながらも飛び上がり、胸を張る妖精。
『私マヌケじゃありません！　れっきとしたフェアリープリンセスです。マスターから頂いた名前にだって、貴婦人（レディ）ってついてるんだもの！』

彼女は妖精としての本名？を名乗らず、オレにつけて欲しいと言ったので、レディ・ワトソンと名付けた。
基本、オレにネーミングセンスを期待しないでクダサイ。

「ほうほう、プリンセスかい。これまた難儀（なんぎ）な。で、異端な祝福まで使って、どうしたんだい。今さら治療師になりに来たなんて言わないだろうねえ」
老婆は意地悪く言いながらドアを閉めた。

これで、森と、その向こうの村に声が届かない。
アリアが怯え、オレの腕にしがみついた。

大丈夫だから、と小さな頭を撫でてから、オレは老婆を見上げた。
「向こうで人が死んでた。死因は、頸動脈を一掻（ひとか）きされたことによる出血死。傷の様子、気温の低さを考えて、死後三日以内。心当たりは？」

カンペキ警察知識。

『きゃー、マスターかっこいー。こんな無礼な犯人、追いつめちゃえー！』

「……レディ・ワトソン。オレ、このばーちゃんが犯人だとは一言も言ってないよな？　聞き込みの邪魔をしないで欲しいんだけど』

騒ぐ妖精はさておき、老婆の目に興味深げな色が浮かんだ。

フェイント込みの運動神経は一歳半で披露したが、ここまで子供らしくないとは思わなかったのだろう。霊眼で、探るように覗きこまれた。

オレは決然と見返す。

別に悪い事してないし。

文句があるなら、あの世で閻魔大王に直訴してくれ。

老婆は、くっと笑った。

「アタシにも見えないなんて、よっぽど業が深いんだろうねえ。だから、いらん事に首を突っ込む。いやだいやだ。死体なんて放っときな。腐る前に、アタシが消し炭にしといてやるよ」

「消し炭って！」

証拠隠滅だろソレ！

思わず身を乗り出したオレに、老婆はめんどくさそうに手を振った。

「死体なんて、珍しくもありゃしない。そのうち村長が教えてくれるだろうけど、あの村は厄介なのさ。間者（スパイ）は来る、偵察は来る、そ

れを邪魔したり排除する者もね。死んでたのは、そのうちのどれかだろうし、悲しんでやる必要なんてないよ」

『だからって、謎を謎のまま放置するなんて許せなーい！』

「……」

オレは、肩から飛び出し怒る妖精を両手で捕獲。丸くフタをした。手の中から、こもった怒声が聞こえてくる。

『マスターひどーい。なんでー！』

理由。

治療師が言っているのは、事実だと思ったからだ。

きっと、オレの知らないところで探り合いと殺し合いが行われている。

たぶん村人も家族も知っている。

知らないのは子供だけで、ある程度の歳になったら村長が教える事になっているのだ。

姉の言い方と同じだから、それは、村人が魔法の素質があっても魔法を好まない原因と一緒。

「じゃあ、もしかしてヨシュアの矢傷も兄（ジョージ）じゃなくて」

「一つ罪を犯してるからって、他のまでなすりつける気かい。あれはお前の兄さ。間者や暗殺者なら、目撃者くらいきっちり絶命させるからね」

あーそうですか。

ホント、プロな人間が日常的に来てるんだな。

「……死体、消し炭って、雷撃でもできるんだ」
ため息をつき、オレは話をそらした。
村ぐるみの大事（おおごと）を、話も聞かずにどうこうしようとは思わない。
察した老婆は家を出て、雪に残っているオレたちの足跡を逆に進んだ。
そして死体の前まで来ると、火炎を放った。
凝縮され、空気さえ歪む高熱。
死体は、消し炭どころか、無となった。
うわ、何コレ。レベル換算できないんですけど。
「さすがに雷じゃあ無理だね。知らなかったかい、アタシは一つを除いて、全属性の魔法が使えるのさ」
「……ひとつって」
予想外の大魔法に、オレは尻もちをついていた。声も震えている。
「治癒魔法」
どんな治療師だよソレ！

11　街へ行こう　1　（五歳）

5月、植え付けなどの農作業が一段落した頃。
まだ洗礼を受けていない村の子供全員で、街の教会に行くことになった。

洗礼というのは、教会による祝福である。内容は魂の保護と導き、だそうだ。受けないまま死ぬと、死者の国へ行けずにこの世に縛りつけられる、らしい。

この辺オレが信じてないので、なげやり解説なのは許して欲しい。

オレはロバに引かれた荷台に乗って、きょろきょろしていた。
最初はうちの村周辺と同じような景色だったのが、いくつかの（やたらと広い）畑と森を越えるに従って、中世っぽくなってきた。

もとから中世風だったろう、ってツッコミがあるかもしれないが、ニュアンスが違うのだ。

うちの村は『中世風農村』で、暗くてじめーっとした掘っ建て小屋がつつましく並んでいる。ハッキリ言って、外の方が快適。
だが今見えているのは、生活水準が『中世の町』。
さらに森の向こうには、尖塔がのぞいたりする！　塔だよ塔。これぞ『中世ヨーロッパ』！

『マスター、お城！　あそこに人間の王様がいるの？』

レディ・ワトソンは、森での死体発見以来オレにくっついたままこの世界で暮らしている。
犯人が捕まっていない（捕まえられる状況でもない）＝　事件が解決していない。ので、解決と同時に願いを叶えて妖精の世界？へ帰るいつものパターンがズレたのだ。

「あれは城でなく、教会の塔じゃな。王様は、テラトリスの王都に行かないとおらぬのう」
言う村長ほか全員、妖精がいるのも気にしない。

『そうなんだー。あ、マスター、見て見て！　あそこ、羊がいっぱーい。もこもこかわいいー』
「かわいいー」
子供たち、妖精に賛同。もはや違和感ナシ。
うーん、慣れっておそろしい。

『草食べてるー。あっちのは小川ジャーンプ♪ラーブリー♪いやん、そこ盗賊ー』
……え？

「止まれ止まれいっ」

道に矢が打ち込まれ、ひゃっはーと騎馬の山賊が湧いて出た。
……なるほど。ホントに盗賊だ。ただ、観光と同じ口調で言うのはヤメテくれませんか妖精さん！

御者をしていたおじさんの腕に矢が刺さっているので、逃げるのは無理っぽい。
オレはアリアの頭を下に押し込み、自分も身を伏せた。

視線だけで様子をうかがう。

「見ての通り、金などないぞ」

大人代表、村長が言う。ゲラゲラ笑う山賊たち。

「だろうな。こんな貧相なの、しばらく見てねえ。だが、ガキは売れるからな」

『まあ！　マスターを売ろうなんて、なんて了見でしょう。マスター、何か事件を解決して、この人たちをやっつけろーって願って下さい。即行でホルモン混ぜ挽肉にして差し上げます！』

いえ、お気持ちだけで結構。

つか事件は目の前で、現在進行形で起こってんだけど。

アナタの言う事件はこーゆーんじゃないんですね。ええ、分かってますとも。

11　街へ行こう　1　（五歳）（後書き）

短いですが、キリがいいので。

１２　街へ行こう　２　（五歳）

幸か不幸か、山賊たちにレディ・ワトソンは見えていない。
全員が見えるうちの村が特殊なんだと、改めて感じる。

一方村長は、おじさんの腕の矢を引きぬいて傷口を固く縛った。

ココには二人以外に大人はいない。子供たちは震えて抵抗する様子もないので、山賊たちはそれぞれ得物を持ったまま荷車に寄ってきた。

荷車周辺に１０人、道の両側の木陰に４人。

「おう。使えそうなのも可愛いのもいるじゃねえか。こりゃ儲かるぜえ」

手を伸ばしてきた相手に向かって、オレは叫んだ。

「今だ！」

瞬間、震えながら子供たちが一斉反撃に出た。

「何だ？　痛うぉっ」

山賊から悲鳴と怒声が上がった。

一見ソーセージ・実は腸詰炭酸水が顔に投げつけられ、破裂したのだ。しかも丸い小石入り。

ペットボトル（小）にコーラと小石を入れてシェイクしたのをご想像クダサイ。

しかもペットボトルは破れないが、こっちは破裂可能。もはや武器。いわゆる、良い子はマネしちゃいけません攻撃だ。小石が目に

当たった山賊にはご同情申し上げる。

「次っ！」

やっぱり震えながら、攻撃や防御を展開し始める子供たち。

「なんだこのガキどもっ！」

ただの子供ですが、何か？

ちょっと違うのは、オレが指導した点だ。労働に忙しくて子供をかまえない他の村に比べたら、オレがいろいろ教えた分だけ成長が早い。現代幼稚園児には負けるけど、魔法の素質はもとからあるし。

「子供ってのは、刺激があればあるだけガキじゃなくなるんだよ！」

オレは空をさした指を、勢いよく振り下ろした。

れーっつ、ビリビリ。

雷撃Ｌｖ３が、ずぶ濡れになっていた山賊を直撃した。はい、感電完了。

「マグナス、お前ってホント容赦ねーな」

「そうだねー。敵にしたくない５歳児ナンバーワン」

「……うん？　ソレぜんぜん怖く聞こえねえ」

念のため離れてついて来ていた二人が、追いついて合流した。

挟みうちの形で後ろから山賊に矢を射かけていた兄と、道の木陰に潜んでいた賊を退治したヨシュアである。二人は気絶した山賊たちに縄をかけてゆく。

「オレよりヨシュアの方がこわいって」

彼は木地師として木精霊（ドライアド）の力を借りれるので、伏兵として待機し

ていた山賊四人は、木の幹に飲みこまれて絶命している。本気でやってもＬｖ３のオレより、よっぽど実力者だ。
「それより村長、おじさん大丈夫？」
「ああ。しばらく腫れるだろうが、大事には至るまい」
もちろん村長もおじさんも、木を薄く剥いでつなげた防具を身につけている。
山賊・追剥が当たり前の世で、何の対策もナシに出掛けたりしないって。

あとはこいつらを街の警察に引き渡すだけ。
うん、久々にいい仕事をした。

満足して一人うなずいていたら、
『マスター素敵ー惚れ直すー』
「マグナスすごいね」
「まぐなす強いね」
アリアや子供たちが、敵を撃退した興奮冷めやらぬ表情で飛びついて来た。

オレはもちろん、重みで潰れた。
多少強くても、まだ５歳って事実に変わりはないのだ。

１３　街の教会　１　（五歳）

「エルドハムの子供たち、０歳から5歳まで１２人です。わしどもの村は貧しく、労働に子供の手を借りねばやってゆけません。よって、村人同士で能力のある子に魔術を教え、日々の仕事に参加してもらっております」

村長が受付で、打ち合わせ通りのタテマエを言っている。

貧しいのは前からだが、元は子供が手伝わされることなど無かった。善し悪し以前に、大人は労働に忙しく、体力のない子供にかまっているヒマがないのだ。

だがオレは、治癒魔法以外なんでも使える治療師に、魔法の基礎を教えてもらった。

整理された魔法講義ではなく、感覚でのハナシだったが問題ない。

で、それを子供たちの性格や能力に合わせて教えたのだ。

感覚バナシを伝えるだけなら簡単だ。能力のある者なら、なんとなく分かる。

たまにトラブルもあったが、回復可能な範囲だったので乗り越えた。

たとえば炎撃の練習で火事になったけど、木精霊（ドライアド）に大木を譲ってもらって、前より住み心地のいい家再建とか。

子供だけで山に行って崖から落ちたけど、風魔法でカバーとか。

一人だと事件で惨事だが、１０人もいたらフォローしあえた。

おかげで今や村の子供は、何ができて何ができないか・してはダメか、ちゃんと理解している。必要なら、大人の仕事の手伝いにも参加できている。

結果、生活は少し楽になったが、そんな特殊ちびっこの存在を教会は考えもしない。

魔法使える子供、ナニソレって事になりかねないので、村長が前もって説明中なのだ。

一瞬のウソで、年単位の楽。

熱心な教会信者がいない事もあって、反対する人はいなかった。オレの時と同じ、（うちの村だから仕方ないか）という理解不能な許され方をしている。

ま、村中みな親戚みたいなものだし。連帯感はあるのだ。

「子供をかり出すなんて、よっぽど貧しいんですね。そういう事情なら分かりました。洗礼を行う神父様にもお伝えしておきます。あなた方の村に、神のお恵みがありますように。中に入って順番をお待ち下さい」

特にペナルティはなく、村長は戻ってきた。

教会は天井が高く、広く、やたらとゴージャスでゴシックだった。
『マスター、きれーい』
「だな。レディ・ワトソンの髪と同じ色」
『きゃあっ。マスターったらお上手ー』
……痛い。照れてぺしぺしはたかれたが、金ぴかって、いつから誉め言葉？
「凄いでしょう。この教会は３０年前、カルカス戦役の勝利を記念して建てられたものです」
内部を見上げていると、通りすがりの教会関係者が説明してくれた。
レディ・ワトソンはあわててフードに隠れたが、頭隠して羽丸見え。
しかしこの人も、見留めなかった。視線は人間にしか向いていない。
なんだ、うちの村人以外に見えないなら、隠す必要なかった。
オレがフードを直すふりで肩を叩くと、レディ・ワトソンは嬉しそうに所定位置に座った。
「へー、勝利記念。なんかすげー」
他の子供たちどころか、兄やヨシュアまでぽかんと口を開けて見回している。教会関係者は満足そうにうなずくと、仕事へと戻って行った。
「皆、こっちじゃ」
一番慣れている村長が列に並び、呼ばれた兄たちはようやく我に

かえった。

「この状況だと、洗礼は明日になるじゃろうな」

列の長さを確認して、村長は床に座った。うちと同じように、村ごとで洗礼を受けに来ているところも多い。

「疲れた者は休むといい。ジョージとヨシュアは、これで温かい飲み物でも買って来てくれ」

子供たちが村長にならって座るが、オレは、ちょこちょこと村長へ近付いた。

「教会の中、見て来ていい？」

『この世界の人間の建物を観光するーるるー♪』

好奇心だらけのオレと、歌う妖精。村長は止めてもムダと知っているので、苦笑して頷いた。

まずは観光気分で礼拝堂を一周。

神様の像の左右に、剣を持った勇者と杖を持った魔道師の像があるのを発見した。

すげー。……笑っていい？

しかも。

字の読めない人にも神の教えが分かるように、と作られたステンドグラスは、まるでアニメかゲームの予告ダイジェストだった。いいとこ取りの、構図カンペキ。

……えーと、内容を詳しくお伝えしなきゃダメでしょうか？

……建国時、魔王が支配するせかいで王様がゆーしゃを召喚

して以下略。

……何百年か経って大陸各地で戦争が起こり、時のゆーしゃと魔道師が国旗を掲げた女王と共に、侵攻してきた敵のぐんたいを以下略。

最新にして最大のステンドグラスは、三十年前に起こったカルカス戦役のものだ。勝利記念にこの教会が作られただけあって、やたら力作である。

剣で天を指すイケメン勇者と、低い姿勢で杖を構える美女魔道師のツーショット。

もしかしてここは異世界じゃなく、ゲーム世界か？

あまりのベタさに眼をそらすと、礼拝堂の隅で、１６歳くらいの女の子が膝をついて祈っているのが見えた。

「どうか、妹を殺した犯人を捕まえて下さい。そして、死んだ方がマシと思える永劫の罰をお与えください」

うわあ。

１３　街の教会　１　（五歳）（後書き）

なお、ゲーム世界ではありません。
一回やったし。

１４　街の教会　２　（五歳）

「どうか、妹を殺した犯人を捕まえて下さい。そして、死んだ方がマシと思える永劫の罰をお与えください」

怖えー。

長い銀髪が波打つ美少女だけど、目が据わってますヨ。つか、吊り上がってる。

『マスターマスター、事件です！　れっつごーです！』

肩で妖精が楽しそうにしているが、オレは手でレディ・ワトソンの口をふさぎ（本人が手のひらサイズなので全体を潰した感じだが）、静かに近寄った。

女の子は黒のベールに、黒のドレス。

喪に服す色。

怒りを隠す闇の色。

「おねーさん」

オレはできるだけ丁寧に話しかけたが、激しく睨まれた。

でもめげない。遺族への事情聴取は、警官時代で慣れている。

「あのね、懺悔室（ざんげしつ）に来て欲しいんだって。でも懺悔じゃないよ。犯人を捕まえてあげるから、内緒で話を聞きたいんだって」

はっと、彼女は息をのんだ。固い、疑いの表情。

「……神父さまが……？」

「知らない。黒い服の背の高いひと」

適当に言って開いている懺悔室を指さすと、女の子はふらりと立ち上がった。信じられないまま、様子を見に行き、のぞく。

オレは拳(グー)で彼女に膝カックンし、中の椅子に倒れ込んだところで扉を閉めた。閉じ込めた。

『マスターかっこいー♪』

……妖精の感性ってわからん。

反対側から、同じ小部屋に入る。

懺悔室は中央に区切りがあって、互いに顔が見えない作りになっている。誰がどんな罪を犯したのか知られずに告白するためのシステムだ。

「犯人を捕まえたいなら、手を貸します。まず名前をお願いします」

口を布で覆って子供特有の甲高い声は隠したので、案内の子供だとは分からないはず。

ホント湖南の副音声技術が欲しいです。

ところで今被害者家族に対して丁寧語になってるは、事情聴取のクセだ。紙サマではない。

教会でやるほど、度胸はない。オレは実はへたれなのだ。

「……メガン」

「殺されたのは、メガンさんの妹さん？」

ためらいがちに頷く気配。

だが、まだ迷っている。話して不利になるのを恐れている。

精神年齢２０歳のオレから見れば美少女だが、この世界では１６歳はもう大人だ。

利権その他を判断させられているので、いろいろ考えるのだろう。
仕方ない。やりたくないけど、信頼してもらうためにはやるしかないか。
オレはコホンと咳払いをした。
「メガンさんは資産階級の方ですね。お家は一世代前まで剣を使う仕事をしていたが、親御さんが商売を始め、成功させた。権勢を振るっているとお見受けします。ただしそのせいで他者からは妬まれている」
ユニークスキル【ホームズ】。
情報を（一見）論理的に言い当てる事によって、相手の信頼を引き出す。しかしその論理は直感を基本とし、純粋理論的には破綻している事もしばしば。
……ウソです冗談です済みません。
オレの心の中の、ひとり冗談ひとり謝りを知らないメガンの反応は劇的だった。
「神父様までうちを知っているの！？　噂になってるの！？　どうしてそんな。だって殺されたのが妹だなんて、警察だってまだ分かってないはずなのに」
「もちろん本官（わたし）は知りません。ただ、推理しただけです。あなたの服装は貴族階級といってもいいくらいに華美だ。ですが、立ち居振る舞いはそうではない。がサツというのではなく、腰を落とした歩き方、無意識に左腰を払う立ち方などは剣術家の特徴です。女性には珍しい」

メガンはあわてて口を閉じた。行動だけでなく、自分の口調もお嬢様らしくないと気付いたのだろう。赤くなってうつむいた。

「こんなふうに、見ただけで分かる事もあります。聞けばもっと分かるでしょう。犯人についても、です。だから、話してくれませんか妹さんが巻き込まれた事件とは、どんなですか？」

『マスターは信用していいわよ。だって、出会ってから二年間なんて、たーくさん解決してきたんだもの。今度だって、ちょちょいのちょいよ』

その二年間は警官だったから、事件がたくさんあった。

しかし、ちょちょいの……って、レディ・ワトソン、お前何時代の妖精だ。

ヴィクトリア朝か、１９００年代アメリカか、それとも昭和初期か？

もちろんメガンには見えない・聞こえないので、オレも無言。完全にスルーする。

『つまんなーい。前の世界もだけど、私を見えない人が多すぎるわ！』

これもスルーである。

１４　街の教会　２　（五歳）（後書き）

時代三択は、順に、ホームズ・クイーン・金田一でした。

１５　街の教会　３　（五歳）（前書き）

今欲しい執筆スキル、【中だるみ防止】。
説明が、たるんたるんにたるんでおります。スミマセン。

15　街の教会　3　（五歳）

「……妹が二日前から帰って来ないから、探してたの。そして、神父様は知らないかもしれないけど、昨日の朝、港で若い娘の死体が見つかったの」

オレは神父じゃないんだけど、呼ばれた場所が懺悔室なので、メガンはそう思い込んでいる。

訂正するのも何なので、放置。話を続ける。

「それが妹さんだと？」

ええ、と板の向こう側で彼女はうなずいた。

「殴られて顔が腫れて、身元の分かる服もアクセサリーも全部盗られていたけど、間違いないわ。なのにお父様ったら、そんな死に方をしたら悪評が立つ、家名に傷がつくって、遺体を引き取ってもくれない」

名家や新興の資産階級なら、そういう理由もあるかもしれない。

「身元不明な死体なんてたくさんあるから、警察も表面だけの調べしかしてないみたいだし」

あー。なんだか耳が痛いです。

うちの署も失くし物からオレオレ詐欺まで、忙しくて手が回らないこともあったよな……（遠い目）。

じゃなくて。

遠い目をしてる場合じゃなくて。

「分かりました。調べますので、今日のところは一旦お帰り下さい。お嬢様なんだから、付添いの人も一緒でしょう？　あまり長くいては、不審に思われます。明日ここで、同じ時間に」

オレは現実を思い出して指示した。

メガンもハッと顔を上げ、さっきよりも赤くなった頬を押さえる。

「わ、わたし何をこんなしゃべってしまったのかしら！　でもありがとう。聞いていただいて、少し気が楽になったわ。本当に犯人を捕まえてくれたら、もっと感謝します。寄付もするわ」

『寄付よりお菓子がいいー』

聞こえない主張をするレディ・ワトソンが扉の押さえを外したので、喪服の女は足早に去って行った。

「オレも。こっちに生まれてから一回も食ってないからなー。じゃあ成功報酬は菓子をねだるとして、レディ・ワトソン。あの人について行って、周りの話を盗み聞きしてきてくれ」

『内偵ね！　任せて。だって私はレディ・ワトソンだもの。行ってきまーす』

妖精はインヴァネスコートの裾をひるがえすと、さっそうと飛んで行った。

「……」

うーん。よっぽど『探偵と助手』ごっこが好きなんだな。あのネーミングを誇らしげに胸をはって言われると、良心が痛む。

彼女が帰ってくるまでする事はない。
オレはぷらぷらと教会内の探索に出かけた。

見学を終えて昼寝から覚めると、夜になっていた。

『マスター、おはようございまーす』
妖精が、オレの鼻の上に両手をついて身を乗り出した。
「……おはよ」
ドレスの裾がくすぐったくて、くしゃみが出た。

「マスター、カゼ？」
あおられた妖精がくるくると宙に舞いながら笑っている。
「いや」

床は冷たい石だが、初夏なのでかえって涼しいくらいだ。オレは腹にかけられていたタオルを兄の顔に乗せ、レディ・ワトソンをつれて祝福待ちの列から離れた。
蝋燭（ろうそく）は消されていたが、教会内はステンドグラスを通した月光でほのかに明るかった。

礼拝用の長椅子を避け、５歳児には重いドアを体重をかけて開けて外へ出る。

静かだった。
教会付属の宿泊施設や修行スペースには灯りも見えるが、こっち側、参拝者空間には誰もいない。

「よし。で、レディ・ワトソン。メガンはどうだった？」
オレは扉の前の石段に座りこんで脚を伸ばした。

１６　街の教会　４　（五歳）（前書き）

実はおばあさんには秘密があったのです。

16　街の教会　4　（五歳）

『マスターが言った通り、元は剣術のお家。なーんと騎士の家系。メガンのお父さんだけが……ええと、はずれ者？　っていささやかれてたのー』

それだけで父親の苦労が想像できてしまう。

一人だけ『違う』のはたいへんだよな。

『貿易を始めて成功したんだって。おっきなお家だったのよー。家族のほかに、泊まってる人たちもいてね、泊まってる親戚さん達はみんな帯剣してた』

「うん」

『メガンは帰ってからね、その親戚の子供に八つ当たりしてたの。あなたのオジサンが妹を殺したけど、教会がオジサンに罰を下してくれる、いい気味ねって』

ふうん、とオレは夜の街を眺める。

石畳で覆われた道、綺麗な家々。

村とはぜんぜん違う街。

たまにレディ・ワトソン以外の妖精も飛んでいる。

『マスター、なんで怒らないの？　メガンったら、犯人を知ってたのに言わなかったのよ！』

「まあまあ。続きは？」

怒る妖精のコートからミニサイズの虫眼鏡を抜きとり、街に向けてみる。

真っ黒な靄があちこちでわだかまっていた。

うお。悪意が濃いー。

『子供はオジサンはそんな事しないって言ってたし、親戚の人達も違うって言ってたけど、だったらなんで妹がいなくなった日にあの人も消えたのって、意地悪に訊かれてたわ。でもメガン、訊きながら泣いちゃったけど』

オレは虫眼鏡を返してため息をついた。

真夜中のため息が似合う五歳児。それってどうよ。

「なるほど。そんな大きな屋敷なら、門番いた？」

『ぶぶー。いませんでしたー』

そうか。屋敷中用心棒だらけみたいな騎士の家に入る泥棒や不審者って、あんまりないよな。

例えるならセ〇ム本社？

「執事は？」

『そっちはいたわ。メガンに、無用なオクソクはおやめ下さいって言って、集まってた親戚には、ダンナサマは事を荒立てるなとの仰せです、って。執事ってすごいのね。どこにでも出没して、お家の事ぜーんぶ把握してるの。お嬢様の目は節穴でございますかって言ってくれるし、ねえ、マスターも執事やとって？』

いやいや、男（オレ）が雇うならメイドさんだろ。

できるなら冬さん似の、いや、いっそ本人で。

と妄想モードに入りかけていたら、教会の見回りがやって来た。

夜中に起きてると魔にとり憑かれるぞと怒られたので、素直に謝って兄の横で丸くなって寝た。

とり憑かれるのは、フェアリープリンセスで間に合ってます。

早朝、他の団体は食事の支度に忙しく、参拝者はまだ来ない時間。
オレを含めた子供たちは、村長に連れられて教会見学をしていた。

村長は、ひときわ派手なカルカス戦役のステンドグラスの前で足を止める。
「この魔道師は、森の治療師なんじゃよ」

……ハイ？
杖持ってポーズ決めてるこの美人が？
オレに雷撃ぶっ放してくるあの老婆？

「会心の一撃（じょうだん）？」
イコールな要素がどこにもないんですけど。
子供たちからも、驚愕の声が上がっている。

「あいつは、そりゃあもう強くてな。本気になったら、勝てる魔道師なんておらんじゃろうよ。凱旋（がいせん）当時は、救国の英雄と讃えられた」

マジすか。時間って容赦ないなー。３０年前に見てみたかった。
それともこっちが奇跡の一枚？
製作者が美化しすぎただけ？

え、着眼ポイントそこじゃない？

「……それがホントだったら、なんであんな辺鄙（へんぴ）な場所で、治癒もできないのに治療師になってんの？　普通、宮廷魔道師とか貴族の

家とか、引く手あまただろ。実はばーちゃん引きこもり？」

村長は苦笑した。

「それが村の安定につながるからじゃよ。わしらの村は、潜在的に魔法の素地を持っておる。マグナスが話しただけで、年端もいかぬ子供たちが魔法を使えるくらいにな。だが、過ぎた能力は平地に乱を生む」

村長は移動し、古い時代のステンドグラスを見上げた。

前にも説明した、国旗を掲げた女王と勇者と魔道師の、王道ど真ん中・ベッタベタな活躍が描かれているヤツである。

「この女王は、テラトリス中興の祖。ガウリュディケという」

異国っぽい名前である。

子供たちは舌を噛んでいる。実は発音練習用なのか。

子供を諭（さと）すよう唇に人差し指を立てると、村長はささやいた。

「以前少し話したと思うが、きちんと説明しておこうと思う。魔道師はアルフレイド。彼もうちの村出身じゃ」

１７　街の教会　５　（五歳）（前書き）

サブサブタイトル『老婆と事件と現在の勇者？』
と思ったら、前二つまでしか入りませんでした。

17　街の教会　5　（五歳）

珍しく村長に、黒々とした気配があった。

以下、村長の話。

アルフは、王の妾の娘ガウリュディケに肩入れをした。
当時テラトリスは分裂状態にあったが、アルフの魔法の前に敵う者などなく、次の王はガウリュディケとなった。

国の王さえ決めてしまう――――それだけの力の持ち主が、当たり前のように村には生まれた。

玉座についた娘は、腹違いの兄弟や貴族に味方せぬよう、村を滅ぼそうとした。
アルフは、家族や親戚が殺されるのを止めなかった。彼もまた、自分より強い者が現れるのを恐れたのだ。

そうして一度ほろんだ村は、女王が亡くなり、アルフが老境に入ってから間違いをおかした女によって再建された。
劇や芸、歌を披露する流れ一座にいた彼女は、退団後、誰にも知られずに子を産み育てたという。

「その末裔（すえ）がわしらじゃ。完全なる秘密など無くてなあ。今も、他国や王や貴族が、村の様子を見に来ては、牽制（けんせい）し合う。素養のある村人を引き抜こうとしては、雇い主ごと始末されておる」

「マグナスぅぅぅ」

『マスターぁぁぁ』
アリアには腕にしがみつかれ、レディ・ワトソンには頭の上で半泣きになられた。

確かに、引き抜かれ率一番はオレだよな。
見ただけで雷撃を返し、子供たちに魔法の手ほどきまでしたんだから。

でもこれで分かった。
なぜ村人が積極的に魔法を使わないのか。
なぜ子供のお遊びレベルなら大目に見ているのか。

命がけの政争に巻き込まれるのは嫌だし、そこまで他に知られている状態で隠したってムダって事。

前に（ここ魔法使いの隠れ里？）と思ったのはアタリだった。
牽制しあい、殺し合った末の死体も見てるし、リアルに身の危険が想像できマス。

ただ、あんな非常識な治療師のばーちゃんが殺されてないんだから、まあ何とかなるだろう。

「そんな訳（わけ）じゃから、ほどほどにな」
「はーい……」
と、全員ききわけよく、元気なく返事をした。

長々と並んだ洗礼は、あっさり終わった。

事前申告していたせいもあって、魔力の発現や偏(かたよ)りも「君たちたいへんだねえ」くらいの軽さで流された。

大理石で作られ（自宅用子供プールの5倍の大きさ）、金で縁飾りがなされた丸い浸礼槽に仰向けでどっぷり沈められるのだが、アリアが、溺れる恐怖に魔法をつかって抵抗したのが問題になったくらいだった。

（ちなみにアリアは腕力で沈められ、洗礼完了と担当者が手を離した瞬間天井まで飛び上がり、全員がぽかんとする中、兄(ヨシュア)にしがみついて号泣した）

『マスター、何か変わったところは？』

「特にナシ」

「洗礼により、神の祝福も与えられます。祝福はひとりひとり異なり、目に見えるもの、見えないもの、常時現れるもの、特殊なときのみの顕現(けんげん)と、さまざまあります。中には不都合と思うものもあるでしょう。しかしすべては神の御心。真摯(しんし)に受け止めるのです」

洗礼がなされる前に神父はそう言っていた。

終わった人々の間からは、「アイテムゲットー」だの「商いの精霊の加護がついた！　売買時＋０．３％有利！」「不眠不休の体！？　これホントに祝福なの？」だの聞こえてくる。

しかしオレにはまだ実感できる何かはない。

祝福は、食べ物が増える魔法のポケットなんかいいな。

アイテム降れアイテム降れと願いながら、渡された白い服に着替えていると、ひらりと紙が降って来た。

――――主殿(あるじどの)の祝福になってやったぞ。でも今忙しいから、後で行く。

紙にはそう書いてあった。

『……マスター……これって』

「ああ。言いたくないけど……精霊来るんだろうなあ……」

ただでさえ妖精にとり憑かれてるのに！

また増えるのかよ！！

なんか今から頭痛がしてきた。

頭痛をこらえて礼拝堂に戻ると、メガンはすでに来ていた。

懺悔室(ざんげしつ)で、指を組んで神に祈っている。

『マスターって忙しいわよねえ……』

「言うな。これも元警官としての務め」

祝福ダメージの悲壮感を漂わせながら、オレはするりと懺悔室に入った。

「お待たせしました」

板の向こうへ丁寧語で話かけると、メガンが鼻をすすりあげた。

「神父様、ごめんなさい。先に懺悔を聞いてください。わたし、犯人を知っていました。親戚なんです。素敵で優しくて強くて、わた

しも妹もあの人をお慕いしてました！　でもあの人、妹と逃げたんです。きっと途中で邪魔になって殺して捨てたの！」

涙声で言い終えた瞬間、五歳児（アリア）と変わらない手放しの号泣が聞こえた。

「ふうっうっわあああああっ、わたしを選ばなかったあの人なんか、神罰で苦しめばいいと思ったの！　妹だって、わたしに内緒にするなんてぇぇぇぇっ！」

『どーろどーろー♪』

泥沼展開にチャチャを入れる妖精。

「駆け落ちだと思ったんですね」

フォローするオレ。

うわあああああんっ、と泣き声がさらに大きくなった。

え、フォローじゃなく墓穴だったか？

これで教会関係者が来たら困る。

さすがに焦って、オレは板の向こうへとささやいた。

「それ、メガンさんの誤解」

17　街の教会　5　（五歳）（後書き）

クリスマスイブにこんな話（苦笑）

１８　街の教会　６　（五歳）（前書き）

サブサブタイトル『老婆と事件と現在の勇者?』のこり。

18　街の教会　6　（五歳）

「それ、メガンさんの誤解」

……泣き声がやんだ。

「教会っていろんな人が来て、いろんな噂話をしてくんです。その中に、勇者候補失踪って話もありました。少し前から、騎士の一族として名高いカーリバング家が街に来てるそうですね」

昨日レディ・ワトソンを送り出し、教会内を探索している時に聞いた。

……しゃくり上げる音も、やんだ。

「勇者候補の家族は、一族のはぐれ者である新興貿易商の屋敷に泊まっていた。しかし三日前に失踪。認定試合を行うはずの軍部や騎士団が、独自に探しまわっている。そんな噂を聞いたんですけど、メガンさん、あなたの家ですね」

『マスター、私の内偵ぜんぜん役に立ってないーっ！　ムダ足ーっ？』

肩に乗ったフェアリープリンセスが、足をジタバタさせて騒ぎ。

「軍部まで！？　そんな大事（おおごと）になってるなんて。失踪……いいえ、駆け落ちよ。お父様も執事も、試合には代理を立てて済ますから、絶対に内緒にしろって言ってたのに。どこから漏れたのかしら。お

咎(とが)めがあったらどうしよう」

カーリバング家の娘だと知られてそわそわし始めた、メガンの激情は過ぎた。

「ないと思いますよ。いっそ、認定前で良かったんじゃないですか。それはともかく、最新の噂だと、三日前の午前、イルの港で一人で乗船する勇者らしき人物が目撃されてます。昼間から駆け落ちって、あんまり聞かないですよね」

「三日前……そういえばわたし、妹とお昼を一緒に食べた……わ、ね……」

喪服の女は呆然と呟いた。

「隠し事の苦手な子なのに、……普通に……話してた……」

被害者だろうが加害者だろうが、こっちの話を聞かせるまでが一苦労なのだ。

思い込みが揺らいだら、後は簡単だ。

オレは一気にたたみかけた。

「メガンさんの家に門番はいない。人々の動向を一番把握しているのは、執事だと聞きました。執事は三日前、どこで何をしていましたか。勇者候補が出て行き、やがて気づいた妹さんが探しに行ったのを見たのでは？」

「え。え。」

混乱するメガン。

内偵が役立って機嫌を直すレディ・ワトソン。

「主人が事を荒立てるなと言ったから黙ってた？　いいえ、駆け落ちの末に殺害なんて、かなりの醜聞です。見た事をハッキリ言って、単に追いかけたけど物取りに殺されたという可能性を示唆する方が、よほど主人の心にかなう。悲しくも、ありきたりな話ですから、ここまでの噂にはならない」

「……言われてみれば、そう、かも……」

「執事に訊いてみてください。本官は、彼が犯人だと思います。想う相手の不在に気付き、付き人もなしで思わず探しに出た妹さんの後をつけて殺した。目的は金品の強奪。盗られていた服とアクセサリーは、もう売りさばいた後でしょうね」

「そんな……」

アイコンタクトで懺悔室のドアを示せば、妖精はダンスステップを踏んでくるくる回転し、インヴァネスコートとドレスをひるがえしながら扉を開けに行った。

「当たっていたら、寄付はいらないので、庭にお菓子を山盛り積んでください」

『大丈夫。マスターが間違ってたら、私くしゃみ出るもの。今夜は山盛りお菓子食べ放題っ♪』

「執事を、問い詰めるのね。分かったわ……」

勝手に開いた扉に促され、メガンはふらつきながら出て行った。

礼拝堂で彼女を待っていたのは、昨日も見た付き添いの女性と、メイドと護衛だった。
それから、こっちを見ている、小柄で目つきの悪い子供も。
オレより二つくらい年上な感じだ。

護衛はともかく、メイドと子供まで帯剣してるよ。

『マスターマスター、あの子、昨日メガンに八つ当たりされてた子』

あーなるほど。あれが逃げた勇者候補の甥(おい)か。

ものすごく分かりやすい。
いかにも騎士。銀の髪も、鋭い蒼の瞳も、まるで抜き身の剣。
あれが成長したのが勇者候補で、メガンいわく「しかも優しい」なら、そりゃモテるわ。

案外、姉(メガン)と妹両方から迫られて、困って逃げたんじゃないのか？

悪いと思ったが、オレは懺悔室に隠れたまま、ちょっと笑ってしまった。

１８　街の教会　６　（五歳）（後書き）

固有名称が増えたのでご説明。

自国：テラトリス。『三人の地』の意味。神・勇者・魔道師。まんまです。

出身の村：エルドハム。『貴（たか）き村』の意味。知る人ぞ知る魔道師の村。

小さいので、名字＝村名。たとえばマグナス・デ・エルドハム。

メガンの一族：カーリバング家。領地はカーリバンガムと呼ばれている。

『鋼鉄の村』の意味。分かる方、笑ってやってください。

１／１２、くしゃみを追加。

19　街は危険に満ちている　1　（五歳）

懺悔室（ざんげしつ）に隠れたまま笑っていると、勇者候補の甥がこっちへやって来た。

メガンもそうだったが、この一族って動作に隙がない。
歩き方ひとつとっても格の違いを感じさせる。

格――――偉そうとか騎士としての品とかじゃなく、勝てないと思わせる何か。

故・西岡（オレ）勇太郎は、剣道ならそこそこ強い。
けど、この銀色短髪の子供は、同じくらい強いんじゃなかろーか。
小さいからリーチ足りないだろうけど。

マグナスの方のオレだと、相手にならない。
いや、別に鍛えるのやめてるんじゃなく、貧乏で食い物に困って山菜採り優先だから。
精霊に頼めば何とかなる魔法と違って、ムダな体力使えません。

「虫？」
少年は、ホバリングしていたレディ・ワトソンをつかもうとして逃げられた。

『虫ですって！？　しっつれいねえ。この王冠が目に入らないの！』

高い位置で二つに結ったレディ・ワトソンの金髪の間には、華奢なつくりの冠（ティアラ）が乗っている。ドレスにインヴァネスコートという妙

な格好でも、プリンセスと分かるのはそのためだ。
「へーえ。フェアリープリンセス？　いるんだ、そんなモン。お前がメガンに何か吹き込んだのか」
銀色クンは妖精に凄んだ。
ヤンキー程度には怖いが……なんてマヌケな図。
「伯父貴に神罰落とすなら、オレが相手になってやるぜ？」
噴き出す殺気……でも妖精相手なので、やっぱりマヌケな図。
『うわーんマスター、この人が苛めるー』
殺気にあてられたレディ・ワトソンが、オレの隠れている場所へ逃げ戻って来た。
「はいはい。よしよし」
適当に言って背を撫でて慰めていると、少年の視線がこっちに向いた。
扉越しにも感じる威圧。
「ふん。ボスは奥ってか。懺悔を聞くのが異端のフェアリーマスターとはな。出て来いよ。俺は神父だろうと筋通すぞ。いや、妖精とつるんでる時点で神父の資格はねえなあ」
こいつ、ホントに柄悪いな。
外見は悪くないのに、しかも騎士の一族なのに、何このヤンキーぶり。補導したくなる。
でも相手は子供。
ここはオレが大人になって譲歩しよう。

「神罰なんて、オレは言ってない。メガンさんの八つ当たり。その誤解も、もう解けたと思うけど」
「出てこいっつってんだよ」

あー。さすがにイラッとするなー。

「メガンさんが行ったら。こーんなオレに相談してたって知ったら、ショックだと思うし」

不可解な表情をした少年は、メガン達を追い払う手つきをした。
うわ。お前どんだけ傲慢（ゴーマン）。
でもメガンも、資産階級どころか平民でも今時やらない「あかんべー」を返したので、引分（イーブン）。

「これでいいか」
『マスタぁぁー』
「ん」
心配げに首に抱きついてくるレディ・ワトソンと共に、オレは懺悔室を出た。

少年のアゴが、かぱっと落ちた。

「ガキ？」

「自分だってガキのくせに。それから先に言っとくけど、妖精のこと騒いだってムダ。ここの司祭長、見えてなかったから。他のも。聖職者より見えるなら、お前は魔に惑わされてるってハナシになる」

初日、オレにこの教会の由来を教えてくれた教会関係者。あれが司祭長。

てっぺんの人に見えなかったから、レディ・ワトソンを出してもいいかと思ったんだ。

誰だって魔女狩りされたくないから、黙っててくれるよな？

１９　街は危険に満ちている　１　（五歳）（後書き）

ふと思った事。
カーリバング家二人。やんきーくんとメガンちゃん。実はメガンも強いんです。
すいません読み流してください。

20　街は危険に満ちている　2　（五歳）

「お前、なんだ？」
「通りすがりの受洗者」

あぜんとしていた少年は、ガリガリと短い銀髪を掻(か)いた。

「だってメガンに」
「うん。これからは執事の身辺調査、ちゃんとした方がいいって伝えといて。下働きじゃなくても、手癖や柄の悪い人っているから。……ここにも一人」

「俺のどこがだ！　つか執事？　犯人が？」

殺気立っていた気配は消え、混乱して途方に暮れている。

「たぶん。ところでお前名前は？」
「ローガン・エト・カーリバング」
「じゃあローガン、先に謝っとく」
「なんで」

オレは彼の後ろを指差した。

「襲撃者」

「ああ？」
振り返ると同時に剣を抜いたローガンは、自分の二倍の身長の相

手を横薙(よこな)ぎに斬り伏せた。
うわあ。殺気もないが、躊躇(ためらい)もなかったぞ。
『きゃあああマスター早く願って！　きゃあ！』
オレは宙で丸くなっている妖精をひっつかむと、斜め前にすり足移動。白の洗礼服の中につっこみつつ、水撃Ｌｖ３！
「２０人以上いるっ？　お前何しやがった」
良くいえば勇猛果敢・見たまま言ったら『銃刀法違反と傷害罪・殺人罪で逮捕したいけど未成年だからまず任意同行』な少年は、敵を物ともせずに倒してゆく。
こいつに手加減の文字はナイ。ガチだ。
「やったのはオレじゃなくて、お前っ。メガン達を追い払ったから、今礼拝堂、人いないっ！」
ここにまでついて来ていると思わなかったが、目撃者が子供一人しかいなくなったので、うちの村を見張っていた間者や偵察部隊が動き出したのだ。
ひとりがフライングし、他が牽制ついでに確保を狙ったというのが、正確なところか。
さすがオレ。引き抜かれ率ナンバーワン。
「わかんねーぞ！」
ローガンは敵の魔法を跳ね返し（剣に【反射】がかかっていた）、

身長を活かして敵の脚を斬ってゆく。相手が体勢を崩したところで急所に一撃。
素早いし、無理と判断したらすぐに退く。力負けするのは明らかなので、決して打ち合おうとはしない。賢明だ。
「青田買いの一種！」
布で顔を隠している共通点はあるものの、敵は動きも癖もばらばらだ。オレは捕まえようとしてくる手をかいくぐり、もう一度、広範囲に水撃。
「よけいわかんねー！」
濡れた敵に向けて、雷撃ＬＶ３！
……もっとも、何人かに直撃したものの、威力が低くて効かなかった。魔法レベルが低いのに加え、相手に魔法耐性ありだ。
「坊主、無駄な抵抗はやめとけやっ！」
『マスタ～？　きゃあああっ』
服の合わせ目から首を出した妖精ごと、カウンターで風撃をくらって飛んだ。
推定Ｌｖ１０！　懺悔室の扉をぶち破り、壁に叩きつけられて落ちる。
一瞬息止まったぞ。
いや、そもそもオレに魔法耐性がなかったら死んでたぞ！
木片を頭に乗せたまま、オレは咳き込みながら身を起こした。

すぐそこに、敵の集団。互いに牽制しあいながら、こっちへ突進して来る。

その、他者の意思を無視した目。

お前ら、児童虐待で全員実刑だあっ！

２１　街は危険に満ちている　３　（五歳）（前書き）

年始年末は、午前１０時更新でいこうかと思います。
なんとなく。

21　街は危険に満ちている　3　（五歳）

オレが炎撃の呪文を叫ぼうとした瞬間、
『マスターマスター待って！　私に願って！』
レディ・ワトソンが必死にしがみついてきた。
半泣きで。
……頭が冷えた。
うん、確かに、あの老婆がやってた全部蒸発な炎を飛ばしたらダメだよな。
「だったら壁」
『はいっ！』
返事と共に、目の前に迫っていた敵の先頭集団が、結界壁に固定された。
彼ら異物を挟んだまま、結界ができあがったわけだ。もちろんそうなるタイミングを狙っている。警官時代にあみ出した、身の安全を守りつつ犯人捕縛もできる便利技である。
一秒遅れでオレを捕まえようとしていた第二集団は、結界に阻まれて思い切り突き指。
「……お」
男たちの向こうで、ローガンが剣を構えたまま置き去りにされていた。
「おい。俺ガン無視……？」

その方が楽でいいと思うけど。

一方こっちでは、かわいらしく頬を膨らませたフェアリープリンセスが消えた。

『マスター、どうして守備指示なんですか！　排除を願ってくれたら、こんな人たちサクッと殺(や)っちゃえるのにーっ！』

言い残していった内容は可愛くないけどな。

それにどうせ、すぐ片付くのだ。

オレ達がすぐに捕まらないと知るや、残りの男たちは標的を変えた。

互いへと。

速(すみ)やかなる捕獲・離脱が不可能なら、先に競争相手を殺す。生き残った者が結界破りに挑戦、あるいは結界ごとオレ達を移動させればいい。

人殺しを厭(いと)わない犯罪者の行動とは、そんなものである。

血煙りが広がり、礼拝堂に足を踏み入れた人々が乱戦に気づいた。悲鳴。

神父や修道士、墓男までもが呼ばれて駆けつける。教会前を通っただけの町人までもが、野次馬となって押しかける（そこ、間違ってる。騒動からは離れるのが正しい市民。交通整理する側の苦労を知れ）。

男たちは舌打ちし、それぞれ逃げて行った。

「……お、おい……」

後半忘れ去られていたローガンが、呼びとめるように手を上げか

けたが、止まるはずもない。

「あいつら雇ってるの、お偉いさんなんだって。だったら誘拐現場を目撃されるのはマズイよな。オレが使える魔道師に育ったとしても、表に出したら誘拐犯なのがバレるし」

それ以前に、この状況だと（同業者ぜんぶ抹殺できなくて）誘拐犯の特定が容易だ。不安を感じた他の勢力が、同盟して攻撃してくる可能性もある。

結界に捕えられた男たちは、すでに自己消滅の魔法を発動させて消えている。

そういう職種なのだ。

ため息をつき、オレが中から触れると結界は消えた。

「マグナス、大丈夫か！」

襲撃者を追う者、ただ騒ぐ者をかき分けて、村長と兄が走って来た。

「へーき。ケガもナシ。勝手に動き回っててゴメン」

オレはぺこりと頭をさげた。

さげた頭を殴られたが、今回はオレが悪い。甘かった。レディ・ワトソンがいたからいいものの、そうでなかったら誘拐されてたと思う。

「村長から聞いただろうがっ！　お前は当分、一人で出歩くの禁止だ！」

「うん」

「返事が軽いのう。いっそ治療師に預けるか」
「え。それ勘弁。ばーちゃんとこ行ったら、説教どころじゃねーよ！」
「だからいいんだろッ。やっぱりお前は反省が足りん！　ぜんぜん足りんっ！」

主に兄に怒られた。村長は教会の人々相手に、見事な被害者ぶりを発揮している。やるな村長。

そんな中、ローガンが剣を収めてやって来た。

「お前、何」

シリアスだった。
だったら真面目に答えるか。

「こんな子供まで巻き込まれたのか？　悪かった。あまり詫びもできないが」
オレは兄を遮った。
「兄ちゃん。そいつ、ローガン・エト・カーリバング。騎士の一族で、勇者候補の甥なんだって」

兄が固まった。
こう言ったら何だが、身分が違う。子供であっても、騎士に無礼があったら簡単に首が飛ぶ。
そしてそれ以上に、オレ達『大魔道師』の対となる『勇者』の関係者。

「それが何だってんだよ」
とたんに不機嫌になるローガン。もともと悪い目つきが、極悪に

なっている。

「オレ達エルドハムの人間。って言ったら分かる？」

今度はローガンが固まった。

こっちはこっちで、大魔道師を排出する村を知っているわけだ。

「こうやって偶然会うのって、珍しいんだろうなー。でもメガンさんには内緒な？」

「な、な何。もしかしてメガンに何か」

兄より早く復活したのはいいが、ナゼ焦る？

憧れてるとか？　そっか、だからついて来たのか。

シリアス中止。納得して、オレはにやける。かわいいよな、こういうの。中身２０歳なマグナスには無理な純情だ。

「ないない。話聞いたのは偶然と、あとレディ・ワトソンのためだから」

言って、思い出した。

メガンが庭に置いてくれる菓子（ほうしゅう）、レディ・ワトソン食えないじゃないか！

しかも彼女に飛んで取りに行かせる予定だったのに！

……うーん。

事件じゃなくても呼びだしていいかな。寂しいって言ってたし。

でも今回呼び出し時間長かったし、妖精界？でファイト一発なエネルギー補給してるかも。

ようやく休めたのに、すぐ呼んだら悪い気もする。

しかたない。

「オレ今夜メガンの屋敷に忍んで行っていい？」

菓子取りに。

最後の一言を、二人は聞いていなかった。

「テメエ否定したそばから夜這い宣言か！？　いい度胸だそこに直れ、剣のサビにしてやる！」

「マグナスいつの間にそんな子に！？　にーちゃんは悲しいぞっ、ねーちゃんに言いつけてやる！」

……こうして、五歳の夏は終わった。

納得いかねーっ！

21　街は危険に満ちている　3　（五歳）（後書き）

マグナスのしゃべり方が不統一だと思われるでしょうが、はいそうです。
地の文：素。
家族や村人、知られると問題ありそうな人に対して：五歳児らしさを演技。
一時的な事件関係、その他どうでもいい人に対して：警官仕事の時は丁寧語、それ以外は素。
成長すると、演技部分が消えるはず。

２２　番外・ローガン視点

「ローガン！　集中できないなら稽古は止めだ！」

父が厳しく背を向けた。

勇者候補とまで称えられた伯父が失踪し、しかもそれを軍や騎士団に知られてしまった。

街で行われた候補認定試合には父が出たが、７０歳ちかい魔法使いの老婆に１０秒で負け、恥をさらした。

そんな事もあって、父は気が立っている。

父を負かしたのは、３０年前のカルカス戦役で勇者と共に戦った大魔道師だと聞いた。

今では現役を退いているが、勇者として認定されるためには、あの老婆に勝たなければならないのだと。

会場で実際の試合を見たが、老婆の周りにはとんでもない魔力が渦巻いていた。

ぞっとした。

冷や汗をかいた。

勝てないどころの話ではない。直接向き合ったら、逃げださないだけで精一杯だろう。

ただ、顔色をなくして震え、動けなくなった他の者に比べたら、俺はまだマシだった。

恐怖を感じながらも、観戦している場から老婆を凝視していた。
術の在り方を探ろうと必死になっていた。

それが、子供としては異例な胆力と評された。
武人の鑑（かがみ）・見事な心意気だと、軍の部隊長や騎士団長、お忍びで会場に来ていた王子にお誉めの言葉をいただいたくらいだ。

出場予定者が試合を放棄して逃げたカーリバング家としては、ようやくそれで面目を保った。

「……」
俺は跳ね飛ばされた剣を拾った。

「大丈夫ですか、ローガン様。ただ今手当をいたします」
「悪いな」
タオルを渡してくれたメイドが、すぐに治癒魔法の呪文を唱え始めた。

メガンの屋敷に勤めているが、滞在中は俺の世話係をさせられている。

深く斬り裂かれた右腕が、あっという間に治ってゆく。
教会の認定証では、二級の治療師。国や軍で働く一級に次ぐ腕前だ。

だが、彼女から感じる魔力は、懺悔室（ざんげしつ）にいたガキよりはるかに少ない。

思い出したら腹がたった。

あの、やたらと余裕な黒髪のガキ！

絶対俺より歳下のくせに、敵に囲まれてもヘーゼンとしやがって！

妖精なんて異端なモノを連れてるくせに、逆に俺を脅すなんてナニサマだ！

敵も敵だ。

勇者候補の伯父に鍛えられ、領地でも城でも一目置かれている俺をガン無視って、なんだよ！

「……」

まあ、あいつの方が、俺より脅威だったのは認めてやる。

礼拝堂で吹っ飛ばされた直後、あのガキの魔力が沸いた。

父もメガンも、一族の誰も分かってくれない妖精や、精霊や、その他まわり全部の目に見えないチカラがあいつへと集中した。

歓喜し、乱舞し、思うまま暴れるチカラの奔流。

妖精が踏みとどまらせたが、あのままだったら怖い事になっていたと思う。

そう、怖かった。

魔法使いが怖いと、初めて思った。

あれを知っていたから、試合会場で老婆の魔法を見ても何とかなった。
不発に終わった魔法攻撃の攻略の仕方にまで、考えが及んだ。
……だからといって、お褒めの言葉をいただいたのは、あいつのおかげなんかじゃないけどな！

「治りました。でもまだ貧血状態ですから、激しい稽古はお控えくださいませ」
「分かった。――――なあ」
傷は治っても服は血まみれなので、着替えに部屋に向かう。
「はい」
「大魔道師級の魔法使いって、割と普通にいるのか？」
メイドはメイドらしく、控え目にほほ笑んだ。
「いいえ、ローガン様。普通にいたら、大魔道師なんて呼ばれません。わたし達魔法使いには、雲の上の存在です。あまりに違すぎて嫉妬すらできない、とっても凄い方ですよ」
「……誉めるな」
「はい？」
「あいつを誉めるなと言っている」
娘は不思議そうだったが、うなずいた。
ふん。

どれだけ凄いか知らないが、メガンは渡さん。
犯人が執事だと言い当てたのも評価してやるが、だから何だ。会うのも話すのも許さん。

だから！
あいつにこの屋敷に入ってこられるくらいなら、菓子を運ぶくらい何でもないんだからな！！

22　番外・ローガン視点（後書き）

というわけで、メガンの報酬を運んだのはローガンでした。

23　お家へ帰ろう　1　（五歳）

来たときと同じく、オレ達はロバがひく荷車に乗って村に向かっていた。

かたわらには、メガンからの報酬が詰まった袋。

村に着いてから皆で分けて食べようと言ってあるので、アリアをはじめとする子供たち――と、うちの兄（ジョージ）は、そわそわと袋の周りに集まっている。たまに袋を開けて深呼吸、匂いをココロユクマデ味わっている。

兄がそんななので、ヨシュアも荷車の横を馬で並走している。盗賊対策に、隠れて後から来るはずなのに、コレ。

どーしようもない。

と、オレはテンションだだ下がりで思った。

うまいもの万歳なオレだ。

本当なら目キラキラ、よだれダラダラでもおかしくないのだが……中身が！

袋の中身が！

クッキーや蜂蜜漬け、乾燥スライス果物なのだよワトソン君！！

違うだろ！

豪商や騎士階級の菓子って言ったら、普通ケーキとかチョコだろ

！！

パンがないならケーキを食べればいいのにってハナシだろ！？

「マグナス、とっても美味しそうな匂いだよ」

「まぐなすー。はやくむらにかえるー。たべるー」

「……そだな」

期待が裏切られたオレは、魂を口から出しながら荷車に揺られていた。

そんな時だった。

道に矢がざくざく突き刺さった。

「おらおらおら、死にたくなかったら大人しくしろいっ！」

またもや山賊が湧いて出た。

もはやネタだな、うん。

大人である兄とヨシュア、村長と御者のおじさんへは、既(すで)に攻撃がなされている。防具を突き破って刺さる矢。

しかも来る時と違って見える位置にいたので、すぐに接近戦へと展開されている。

「おじさん、逃げて！」

「けだかくじゆうなるかぜのせいれいにきねんもうしあげる！」

不利を察した子供たちが、反撃に出た。

残念ながら気が抜けてしまった炭酸爆弾は使えなかったが、できる範囲で呪文を唱える。

御者が風で飛ばされ、接近戦から離脱。安全地帯へ転がった。

……うーん、まだ子供だし。優先順位がまちがってるのは置いとこう。

「うおっ！？」
「なんだこのガキども！」
全員が魔法を使えるのに驚く隙をついて、攻撃が当たった。

しかし威力が弱い。まだ一撃で人を倒せるほどの力はない。
そして一撃でなければ、子供も戦力と認識した山賊の敵ではない。

「死なない程度に躾（しつけ）てやらあ！」
大刀を振りかざす盗賊たち。

「水撃！」
「硬化じゃ！」
「根を伸ばし絡み取れ！」

オレと村長、ヨシュアの声が重なった。こっちは、チクチク削る程度の子供の魔法に比べ、かなり効く。

「うわあっ」
「なんだと！　なんで魔法使いがこんなに！」
山賊たちも、さすがにひるんだ。

剣の柄で殴られた子供たちは、村長の魔法で全員保護されている。ケガはない。それでも暴力がふるわれたのだ、普通は怖い。
しかし子供たちは、泣くどころか反撃に出た。

「マグナスのマネっ！」
水をまき、雷を落とし、風や大地の助力を得て敵の足をすくう。

「とどめっ！　雷撃！」

『我が祝福を主殿（あるじどの）に！』

聞きなれない声。

そしてＬｖ３のオレ雷撃は、Ｌｖ６くらいの破壊力をもって直撃した。

２３　お家へ帰ろう　１　（五歳）（後書き）

中世初期のお菓子はこんなもの。
メガンが意地悪したんじゃありません。

ところで、本日から3日まで不在です。
もしご感想をいただけても、返信が４日以降になります。よろしくお願いします。（更新は毎日設定してあります）。

２４　お家へ帰ろう　２　（五歳）

静電気を帯びた空気が、周囲に漂った。

「って、やり過ぎだろオレ！」

Ｌｖ３でちょうどいい感電具合なのに、こっちが不安になるくらいビックビク跳ねてるんですけど！

白目剥いてるのもいるし！

オレは犯罪者は捕まえたいが、全員死刑とかは思ってない。

水たまりを避けて駆け寄り、心臓に耳を当てる。

生きてた！

良かった～～～～！

ほっとして、ちょっと涙目でへたり込んだ。

『主殿（あるじどの）。せっかく祝福してやったのに、無視か』

斜め上を見上げると、女の子（極小）が浮いていた。

茶色のつぶらな瞳、真っ白ふさふさな髪はいいとして……頭からはみ出てるつぶれ三角形二つは何だ？

耳？　耳なのか！？

半分の位置で折れてるから、犬耳？　それとも猫耳？（スコティッシュホールド）（↑こだわるポイント違うだろ自分！）

あ、長毛しっぽだから犬だ。

遠巻きに見ている村長や兄達が驚き、子供たちは喜び騒いでいるが……正直、オレは驚くのにも飽きた。

異世界だもんな。犬耳精霊の一匹や二匹、いるだろうよ！

それよりオレは、腹がたってる。

勝手に手を出すなよ！

うっかり殺人犯になるところだったじゃないか。

この世界だと犯罪者を返り討ちにしても罪にならないが、キホン回避だろ回避！

『なんとか言え、主殿。今なら感謝の言葉、絶賛受付中なのだ』

でも、偉そうな言葉とは裏腹な誇らしげな顔は、誉めてもらいたがっている。尻尾バッサバサ振ってるし。

好意なのを、あんまり強く怒るのもなあ……。

「遅れてくるって言ってた、祝福のヒト？」

結局ガツンと言えず、普通に訊いてしまった。

……ああ、異世界まで来て、しかもまだ子供なのに、気配り気づかい日本人気質が抜けないオレって。

『そうだ。普通なら一定の恩恵を授けるだけで、こうして精霊自らがやってくるのは珍しいのだ。貴重なのだぞ』

威張られた。

『だから前の主も我を離そうとせず、祝福が切れたというのに縋(すが)りつきおった。まったくもって見苦しい。あまりに邪魔だったので、

頭の上に牛乳をぶっ倒してやったのだ』

……異端な妖精はともかく、精霊って聖なるモノじゃなかったっけ？　ぶっ倒すってナニ。

『だからつまり。我が遅れたのはそのせいであって、二日酔いの寝坊ではないと知れ』

「……二日酔い？』

『ではないと言っておる！　聞け！』

真っ赤になって力説する様子に、説得力はありませんでした。

なんか怒る気が失せた。

犬耳だし。山賊もギリギリ生きてるし。ま、いいか。

「これに懲りたら、通行人を襲うなんてやめろよ？」

言えば、ぴくりと動いた山賊の手がゆっくりと上がり……ばたっと落ちた。

一日一善したかもしれない。

「せーれーちっちぇー」

「さまって言いなさいよ。さまって。ね、せーれーさまお名前なんてゆーの」

『我らに名はない。無名のまま、無償で世のため神のために尽くすのが出来た精霊というもの』

子供たちに囲まれた精霊は、ふたたび偉そうにふんぞり返っている。

オレの肩の上で。

ところで精霊さん、人のためって一言が抜けてると思うんですが、わざとですか？

「えー。でもレディ・ワトソンには名前あるよー？」

「あるよねー」

『れでぃ……？　なんだそれは』

「マグナス、二匹目ゲットだな」

止血の草を巻いたせいで、やたら草臭い兄とヨシュアが馬上で笑う。

「さすが敵に回したくない5歳児ナンバーワン」

「ヨシュア、意味わかんねー」

森の治療師が治癒魔法を使えないので、オレも知らない。

だから、知識だけ知ってた手当をした。

しかもそれでもばーちゃんよりマシって、どーゆー事。攻撃魔法しか使えない治療師って、ホントどうなの。そのうちどこかに、治癒魔法を習いに行きたい。

んー、と考えていたら、耳元で叫ばれた。

『主殿！　二匹目とは聞き捨てならんぞ。いつの間に浮気など！』

「あー。順序でいったら、お前の方が浮気相手？　レディ・ワトソ

ンは昔からオレに憑いてる妖精だし」

『なななななんと！　しかも妖精のくせに名があるのか！』

精霊は悔しげに地団駄（じだんだ）を踏んだ。

……オレの肩の上で。

「あるっていうか、オレがつけた」

『ななななんだと！　主殿との絆はそこまで進んでおるのか！　なんと羨ましい、いや、自分勝手な！　許せん。主殿、今すぐその妖精を呼ぶのだ。我が序列というものを教えてやる！』

精霊はきーっと服を噛み絞った。

……オレの肩で。オレの服を。

せっかくもらった新しい服なんだから、やめてくれませんか。

ため息をつき、オレはレディ・ワトソンを呼んだ。

もうすぐ村に着くし、そしたら菓子食べるし。

何より、レディ・ワトソンの方が強い気がするし。

予想は当たり、精霊はフェアリープリンセスに徹底的に伸（の）された。

２４　お家へ帰ろう　２　（五歳）（後書き）

こんな年末までおつきあい下さった方、ありがとうございます。
たくさんの方に読んでいただけて、びっくり感謝な一カ月でした。
来年からはスィーツ祭りと学園編になるので、よろしくお願いします。

では、良いお年を。

25　秋の味覚さまざま　1　（五歳）（前書き）

迎春

今年がみなさまにとって、良い年でありますように。

とご挨拶してるのに、話は秋。季節感ナシ。

25　秋の味覚さまざま　1　（五歳）

9月。
秋である。
待ちに待った、収穫の秋である！

現代の知識を持つチート者として、オレは前から考えていた。
そして前回メガンになんちゃって菓子をもらった事により、野望は切実な願いに変わった。

スィーツを作ろう！！

というわけで、企画その1【収穫作業を簡素化しよう】である。

簡単に言うと、魔法でやれるところは全部やる。

誘拐されかけたのに懲(こ)りてないのかと訊(き)かれそうだが、もちろん懲りてない。
犯罪者に屈するなど、元警官としてのオレの極小のプライドが許さん。

犯罪者には強く、女性には弱く。
それが真のヘタレなのである！

……なんか違う気もするが。
まあいいか。

実際の手順としては、アリアが木精霊（ドライアド）に頼んでリンゴを落としてもらう　→木の下に布状に張り巡らせた魔法糸で受け止める　→魔法糸を波状に揺らしてリンゴを倉庫に運ぶ、である。

魔法糸を操る係は、レオナルド。
１コ年上で、六歳。赤毛男子だ。何をやっても手際が良い。
だからこそ、魔法で何でもやれるのにやらない大人たちが我慢できなくて、オレに協力してくれている。

二か月前には小麦の収穫があって、その時も畑一面、麦の穂の根元にびっしりと糸を張ってもらった。
空中には、麦畑を覆うように押さえ布。
その状態で糸を上へと引っ張り上げると、あら不思議、麦（み）だけが取れるのデス。

魔力・精神力・繊細さ。すべてが必要な作業だが、レオナルドは簡単にやってのけている。
他の子供たちも見よう見まねで手伝ったり、手伝うつもりで失敗したり。

大人は手伝ってくれないが、反対もしなかった。
自分の子供がオレのマネをするのは止めているが、邪魔もしない。
おかげで、森は開墾し放題だった（ストップＣＯ２！　な心配はまだ無いしな）。

さて。リンゴと同じように、ナシとブドウを収穫したら、次はオレの出番だ。

企画その2【×××を作ろう】

その夜オレは、作業小屋にいた。

『主殿(あるじどの)、本気か？』

オレの鼻先に浮かんだカトリー犬(イヌ)が、斜め方向へ視線をそらせながら尋ねる。

「本気だ」

『後悔せぬか』

「しない」

オレの決意が固い事を知ると、カトリー犬は『では』と両手を掲げ――――足元のブドウに向かって命令した。

『か～も～せ～か～も～せ～』

魔女の呪いのようだが、カトリー犬は魔女でなく精霊だ。

雷撃を倍にしてオレの寿命を縮ませた教会の祝福・その名も増幅霊！

教会、なにか間違ってるぞと思った方、大正解。増幅霊ってなんだよ！

でも祝福・不眠不休よりマシだし、使う。

『か～も～せ～』

低音でうなる、白い髪の精霊。

レディ・ワトソンと同じく手のひらサイズの、犬耳の女の子であ

る。ふっさふさの尻尾付き。
彼女に負けた後、済まなかったのだ嫉妬しただけなのだ我にも名前をクダサイと頼みこまれたので、某ライトノベルを真似てつけてみた。
カトリーヌではなく、カトリー犬。
彼女のうなりは、漢字にすると「醸(かも)せ」。
酒造りの用語で、菌が材料のエキスを引き出しつつ発酵させる現象のこと。
その間オレは、水魔法の応用でブドウをかき混ぜている。
つまり作業小屋全体を容れ物とし、ワインを作っているのである。
イメージは、自分が渦の中心なドラム式洗濯機。
本来なら、素人がこんな大量のブドウを一気に仕込むのは無謀だ。失敗したら、一年間の努力が水の泡である。カトリー犬はそれを心配しているのだ。
でもたぶん平気だ。現代人の舌を信じなサイ。
信じる者は救われる。味覚の紙(カミ)の祝福を受ける事ができるでしょう。
つか、ここで知識チート発揮できなかったら、何のためのチートだよ！
ブドウの皮についていた菌が、実の糖分をアルコールへと変化させてゆく。
ほとんどが液体になった時点で、混ぜるの中止。浮いてきた皮と種を、風魔法で飛んだオレが集め、作業小屋の外へ（上の窓から）

捨てる。

「ここまでは良し。カトリー犬、悪いけど後を頼むな」

『良いが、約束忘れるなよ』

下手に出たのはあの時だけで、今現在彼女の態度は元に戻っている。下手に気を使われるよりいいので、構わない。

「もちろん。できたワイン一樽はお前の分。じゃあ、寝てくる」

『ああ。主殿、おやすみ』

うっとりニンマリした酒好き精霊は、一晩中『か～も～せ～』とやり続けた。

次の日。

本来一年は寝かせるべきところが終わっていた。犬耳精霊はワインの匂いに包まれて熟睡していて、ゆすっても起きない。

「で、僕が不純物をろ過する、と」

「うん。いくぞ？」

オレは、樽の上に作られた魔法糸の濾(こ)し布に、水魔法を応用して丁寧にワインを注いだ。

作業小屋の上の窓から、自然法則を無視してワインが大移動。

何をしているのかと見に来た姉をびっくりさせた。

25　秋の味覚さまざま　1　（五歳）（後書き）

１／１０、一部修正。学生的オヤクソクなネタは一般受けしませんでした。

26　秋の味覚さまざま　2　（五歳）

企画その3【秋と言ったらコレだろう！】

『マスタ～～～、昨日は夜遅くまで何してたの』
やたら据わった目で、レディ・ワトソンが訊いた。

「説明したろ。そして結果がコレ」
オレはワインの樽を叩いた。

『時間かかり過ぎです。それに夜じゃなくてもいいじゃない。夜更かしはお肌によくないのよ』
「はあ？　なんでオレが今さら肌荒れ気にしなくちゃならないんだ」
『私の肌の話にきまってます！』
「……分からん。9時に寝たろ？　十分だよな」
『マスターってどうしてそうなの！　ニブニブの実を拾い食いしたとしか思えない！』

『ふわあ～。何を騒いでおる。うるさいぞ、妖精』
半ば折れている耳の片方だけが、ピンと立った。寝ていたカトリー犬が、あくびをし、目をこすりながら起きる。

『二日酔いのお寝坊駄犬は一生寝てていいわよ』
つんと横を向くレディ・ワトソン。

「マグナス、先に掃除をしておくよ」
関わり合いになりたくないレオナルドが、水魔法を使える子供たちを連れて倉庫へ逃げた。

オレは仲の悪い二人の首筋を捕まえると、互いの頭をコンとぶつけ合わせた。
『『痛った～い』』
「ほら、置いてかれたじゃないか。仕事仕事。カトリー犬はブドウ畑で濃縮促進、レディ・ワトソンはアリアと一緒に栗狩り」
頬を膨らませたものの、二人は指示に従った。
企画が成功したら、極上スィーツが食べられるんだと力説したのを忘れていない。
妖精でも精霊でも甘味には弱いのだ。

さてオレは、材料がそろうまで別の美味を探しに行こう。

「マグナス。一人じゃ危ないわ」
森に足を向けると、心配して来ていた姉がついて来た。

「姉ちゃん、畑仕事終わったの？」
大人は今も、古式ゆかしく農作業をしている。
収穫期はたいへんだから、こんな所でオレに構ってるヒマはないはずなのに。

「終わってないけど……」
姉は何か言いたそうにして、黙った。
ここだと言いにくいのかと察して、オレは森へ分け入った。
探すのは、日当たりのいいカラマツやハイマツの近くだ。

「……分かってるんでしょう？　他の大人が止めないのは、マグナスが偵察の人に注目されてると思ってるから。マグナスがいるうち

は、まだ大丈夫って思ってる。そうして収穫は分けてもらう気でいるの。皆ずるいわ」

後ろを歩く姉が、地面に向かって憤りを吐いた。

「ねえ、危ない事はもうやめて。やるなら、もっと自由にできる場所でやって」

真逆な内容は、本気でオレを心配してくれている。

感動した。

でも、たとえば母子家庭のアリアみたいに、オレが自由に出て行ったら取り残される子供もいる。

それに。

「姉ちゃん。オレ、けっこう村の皆好きなんだ。少しくらいズルくても」

って、一回言ってみたかったんだよな！

「……マグナ」

「いやった！　ねーちゃん見ろよマツタケあったー！　採(と)ったどー！」

マツタケ発見！！

キマったとか滑ったとか姉の感動ぶち壊しとか、もはや関係ナイ。

マツタケ様の前にはすべて些事(さじ)。

思わず舞い踊ってしまった。あ、それは舞茸か。

なんでそんな物探してたのという姉の視線はあえて無視し、家に

帰った。洗って切る。日本のより白いけど、ちゃんと匂ってる。いい匂いだ～。死ぬ前には食えなかったからな～。

「いや～。マックスったら、靴下臭い！」

マツタケ様に向かって無礼な。喰わせてやんないぞ、と思っていたら――――困った。

醤油がない。

焼きマツタケには醤油だよな？

だが調味料が塩しかないので、塩をかけて食べてみた。

……うん、不味（まず）い。ちょっとテンション落ちた。

茎はエリンギを丈夫にしたくらいで食いちぎれず、ゴリゴリだった。味もイマイチ。

「だから言ったでしょ」

「まだまだあっ！」

呆れている姉よ、思い知れ。そしてマツタケ様の美味さにひれ伏すが良い！

オレは次に、スープ鍋に細切れにしたマツタケを投入した。

……できあがったスープは、本当に靴下臭かった。

シチューに入れたらまた違ったんだろうけど、シチューのルーどころかバターすらない。牛乳から作った分も、あまりに少なくて残ってないのだ。

だって牛、頭数いないし（後でカトリー犬に乳の出を加速してもらっても、大丈夫だろうか？）。

お湯、塩、マツタケの三つだけでは臭さが倍増されただけだった。
欧米人が喰わない理由、分かったよ。
高級食材をおいしく食べたかったら、先に醤油を作れって事なんだな？　そうなんだな？

「ね？　分かったでしょ？」
姉と母がため息をつき、兄と父が大笑いした。

くうっ～～～～。
いつか醤油も作ってやる。
今回はスィーツメインだからアレだが、諦めたわけじゃないぞ――――っ。

２６　秋の味覚さまざま　２　（五歳）（後書き）

負け犬の遠吠え。
次回、ようやくスィーツです。
１／１０、前話と同じ理由で一部修正。

27　秋の味覚さまざま　3　（五歳）

企画その４【スィーツとは！】

食べようと思えば世界中の料理が食べられるグルメ大国ニッポンに生まれ育った者として、どうしても譲れない想いがある。

菓子とは、あんな悲しい物ではない！

メガンからもらった菓子は、確かに甘味だった。村中喜んで食った。

駄菓子（だがしかし）菓子！

オレが食いたい菓子はチョコやポテトチップスなのだ。

悪いが、乾燥果物はランクインしていない。

蜂蜜漬けも、ヨーグルトの上に乗っている食後のデザートっぽい。

もちろん女の子の差し入れなら何でも食わせていただきマスが。

過去も現在もそんな経験は一度もナイ。

ああ冬さん、あなたの手作りが食いたかった！

『マスター、何考えてるの』

やたら勘のいいレディ・ワトソンが、冷たい視線を向けた。ナゼ、殺気がっ！？

「や、何も。それよりブドウどーなったかなー」

不穏な空気を感じて、ヘタレなオレは敵前逃亡。ダッシュでブドウ畑に行った。

『主殿、これでどうだ！』
カトリー犬が飛んでくる。
「カンペキだ！　お前は天才だ！　精霊の鑑だ！」
冷や汗をかいた反動で全力でほめまくると、精霊は犬っぽく幸せそうに目を細めた。レディ・ワトソンとは反対側の肩に乗る。

『丸一日がんばったのだ』
『何よ。ブドウ、こんなシワシワにしちゃって。食べられないじゃない』
『主殿がそうせよと言ったのだ。聞いてなかったのか』

肩の右と左で、多重放送（ステレオ）で騒ぐのはヤメテ欲しい。
いっそ二人とも畑に埋めてしまおうかと思ったが、自制。アリアとレオナルドに、水分の抜けたブドウを一気に収穫してもらった。

さて。
これが砂糖の代わりだ。

魔法糸と熱魔法で温室作成、サトウキビを育てて砂糖を作るプロジェクトは進行中だが、カトリー犬の増幅を使っても成長促進がせいぜいだ。収穫にはまだ遠い。（ちなみにサトウキビ苗は、ブースト つき風魔法で王都に行って、植物苗を買ってきた。王都にはプランツハンターという、王侯貴族から依頼を受けて未知なる植物をとってくる冒険者がいるのだ。教会の噂で聞いて知った。目的の物以外にも植物をとってきて、自宅兼店で販売しているので、その辺なら個人でも変える）

なので、今回はコレだ。
貴腐ブドウという。川から水蒸気があがってくるような湿気の多い土地でブドウ棚を放置しておくと、皮の表面に勝手に菌がつき、

繁殖する。その結果ブドウの水分が使われ、糖分だけが濃縮されるという、自然に感謝なシロモノである。
そのまま食うと激甘だが、粉々にすりつぶしたら十分に甘味料。
さらに氷魔法で水分を凍結脱水した牛乳　（ブーストｂｙカトリー犬）に混ぜたら、生クリームの出来上がり。

現代知識バンザイ！

あとは小麦粉あるし、卵あるし、オーブンあるし。
ちゃちゃらっちゃっちゃ～と三分間クッキングの曲を歌いつつ（音程微妙）、ちゃんと振るって、泡を潰さず混ぜて焼いたら、ハイ、スポンジケーキ～！

煮た栗を乗せ、ペーストにしたものを生クリームと混ぜて絞ったら、ハイ、モンブラン～。

焼き固めた台に生クリームと梨のコンポートを乗せたら、ハイ、梨タルト～。
同じ手順で、ハイ、りんごタルト～。

やった。
食いたい気力だけで、スィーツが四種類もできた！　しかもケーキ！
チョコでもポテトチップスでもないし、途中からＱＰでなくどら○もんに乗っ取られていた気もするが、終わり良ければすべて良し。

企画その５【実食！】

文字通り、食え！

オレ達がイレギュラーな方法で料理をしている間、村人は地道に収穫し、鹿や鳥を狩っていた。
パンに焼き物に煮物。スープ。やっぱりこういう、オフクロの味がないとな。

それらを持ち寄っての、グルメ祭りである。
喜ばないはずがない！

しかもオレの激うまケーキ！
これぞ本当のスィーツ！！

甘味などロクにない村である。
真剣に感激された。
頬を染めてトロンとする女性陣、感涙にむせびなく男ども。うまうまとはしゃぐ子供たち。
かつてない大盛況となった。

『マスター美味しいですぅぅ！』
『主殿は天才だな！』
レディ・ワトソンはモンブランに登頂、制覇。栗の甘露煮を両手に抱えてかじっている。
カトリー犬も尻尾をバッサバサ振りながら、スポンジに頭から突進。前肢（まえあし）で掘って潜り込み、中に座って食いまくっていた。

大成功っ！！

27　秋の味覚さまざま　3　（五歳）（後書き）

１／１０、かなり修正。じゃが芋の男様よりご指摘を受け、サトウキビ苗の出所その他を加筆しました。

28　番外・ケイト視点（前書き）

ケイトは姉です。滅多に名前でてきませんが。

28　番外・ケイト視点

小さい頃から、マグナスは不思議な子供だった。

普通の赤ちゃんなら、視線は動くものを追う。

なのにあの子は、大泣きした後は意思ある大人のように周囲を見回した。

すこし成長してからも、そう。

やたら食欲を示すのは仕方ないとして（だってお腹すくわよね。うち、ご飯十分ないし）、毒のない物だけを選んだ。言葉も分かってるみたい。

他にもびっくりな事はある。

いっぱいある。

森の治療師よりも効く薬は作るし、一歳半でしゃべるし。

しかもしゃべった内容が『紙サマ』？

凄いのはスゴイけど……これってどうなの？

まあ、家族や村人にも気を配る良い子だから、紙様（それ）くらい別にいいかって気もするけど。

かわいい弟だしね。

でも、あーあ。

これで異端じゃなかったら、生まれながらに知恵の精霊の加護を受けてるって、もっと誇れたんだけどなあ。

あの異端な図見たとき、どうしようかと思ったわよ。
ポンプだっけ？
便利そうだけど、誘拐を恐れて水汲みにさえ魔法を使わない村での採用は無理。絶対無理。

それから、妖精を操（あやつ）ってるのは外には内緒にしなきゃ。
今どき妖術師だってしないわよ。しないって言うか、出来ない。
失われたレア技術を、あんたはどーして体得してるの！

教会にバレたら、捕縛→強制自白→火あぶりコース間違いナシ。
しかも絶対抵抗して、教会敵に回すわよね。
きゃー、いーやー。姉として本気でいやー。

マグナスはしっかりしてるようで、そういう点で抜けてるから、あたしが気をつけてやらなきゃ！
村人へのお願いとか！　根回しとか！！

悲壮な決意を固めてポッコリちからコブを作ってると、リナが洗濯かごを抱えてやって来た。

「ケイトも洗濯？　マグナスにやってもらえばいいのに」
「あの子いま、砂糖の大量生産中」
「うわあ！　いいなあ、夢みたい。マグナスのお菓子って、絶品だもんねえ！　お砂糖使ってなくても美味しかったのに、次はきっともっと凄いのね！」

良かった。今のところ、誰もあの子を責めないし、怖がらない。
森の治療師の家族が人質になって治療師が戦争に出て以来、魔法、

ホント使わなくなったって聞いてる。
あたしも、貧乏よりは使っちゃえって思うけど、でもやっぱり思うだけ。なんとなく怖いし、うっかり目立って目をつけられるくらいなら我慢する。貧乏なのは周辺の村も同じで、我慢できない程じゃない。

他の人も、たぶんそう。使えば肉体的に楽だけど、使わない方が精神的に楽だから使わないだけ。
他人(マグナス)がやる分には、自分に被害がない限りかまわないのよね。

あたしの被害は……まあ、人質くらいならいいか。
あの子、治療師よりキてるから、大人しく脅されるとは思えないもの。常識無視して助けてくれる気がする。
信頼してるから、本人がいいなら、魔法を使うのは止めない。

「期待していいと思うわ。『ひらめいた。クリーム泡立てに風魔法を使えば楽勝だ！　激ウマ万歳オレ天才！』って騒いでたから」

二人で川で洗濯をしながら、うっとりケーキに想いを馳(は)せた。

マグナスは前から子供たちを引き連れて、いろんな事を教えていた。
言葉や計算　（あたしでさえ出来ないってのに！）、食べられる実や野草に、食べられない物のあく抜きの仕方。魔法。

そして今は、極上スィーツ！

参加してる子供たちも大喜びで、もはやカリスマ菓子職人の教室だ。
本人は「辻調(ツジチョウ)キター！」とか、わけのわからない事を言っている。

でも、はしゃぎたくなるのも分かる。
マグナスのお菓子、何年かに一度街のお土産にもらう物より、何倍も美味しかった！
これまで食べた中で、最高の最上！！
教会の祝福精霊でさえ餌づけしちゃうんだもの、もはや天上の美味？

あれで、子供が魔法を使うのを許す親が増えた。やっぱ人間、食欲には勝てないわ。

「ねえねえケイト、マグナスにあたしを薦(すす)めてみない？」
よだれを垂らしかけたリナに、肘でつつかれた。
「え、つきあう気？　年、１０も違うじゃない」

異端って思われないのはいいけど、こっちはこっちで、打算しか感じないよ……。

「言っちゃいけない事言ったわね。どうせ行き遅れかかってるわよ、おばさんよ、行かず後家がかかってるわよ。ああん、ケイトがいじめるー」
「嘘泣きするなら、せめて泣きマネくらいしてよ」
「しかも慰めてくれないし！　いいわよねー相手のいるオンナは」
「……一応ひがんでるの？　笑顔全開で言われても、お祝されてるようにしか見えないんだけど」
「なんとっ。あたしのカオが悪いとまで言う！」
「リナ、疲れるわ」
「そう？　じゃあやめとくね。あ、聞いた？　キャシーってあんたん家のジョージが好きなんだって」

「うそ。キャシー可愛いじゃない。なんであのバカ弟よ」

女同士の話なんて、こんなものである。

根回しフォローは後回しにして、あたしは怒涛(どとう)の会話と洗濯を続けた。

28　番外・ケイト視点（後書き）

本日より復帰します。
ところで、帰ってきたらお気に入り登録とアクセス数の桁が違って
て驚きました。
読んで下さる方、本当にありがとうございます。励みになります。

29　マグナス第三の事件簿　1　（七歳）（前書き）

第二は教会という事で。
なお、ミステリレベルは上がってません。先に謝っておきます。済みません。

29　マグナス第三の事件簿　1　（七歳）

ワインとスィーツを作ったのは、オレの食欲を満たすためだけではない。
売って現金収入を得るためでもあった。
比率は食欲８：収入２……いや５：５で。そう、５：５。
え、何。７歳児に正確さを求めないで下サイ。

という冗談はさて置き、豪商・騎士階級でさえ粗末な菓子を食っているので、王都で喫茶店をやったら大繁盛した。
もちろん持ち帰りにも対応。貴族は店で買って屋敷で食べるから、そっちの方が収入になる。
毎日１回風魔法（ブースター付き）で商品を置きに行くのだが、昼過ぎには完売御礼だ。

すごいぞオレ！
ブラボーオレ！
まるでスィーツ男子！　パティシエほど凝れないけど、よく頑張った！

協力してくれる村の子供たちの中には、ファイアが炎撃である事を忘れていそうなものいる。
その子はオレにこう言った。
「火加減にもう一ひねり欲しいの。焼きムラができちゃうんだもん」
お見事。

魔法って攻撃に使われる事が多いけど、それって最先端技術が軍事開発からきてるからだと思う。でも技術は、娯楽や日常に使われてはじめて、使いこなすって言えるんじゃなかろーか。

火加減（まほう）って、イイ言葉だ。

しかし焼きムラ防止は、魔法技術の精度を上げてくれ。

オレには耐火ガラスを使ったオーブンは作れん。

代わりに、いつかチョコレートを作ると約束しよう！

ここにはないサトウキビなどの苗の仕入れ先、植物採取冒険者（プランツハンター）に訊いてみたのだが、この大陸では見てないとの事。

やっぱりああいう物は新大陸なんだろうか（新大陸あるかどうか知らないが。いや、そもそもこの大陸の地図を見た事すらないんだが）。

よし。無事に警察（ヤード）に就職できたら、そして連休がもらえたら、カカオを求めて、いざ新大陸？に出航だ！

オレの無責任なノリに、アリアがはしゃいだ。

「楽しそう。あたしも参加する！」

『ちょこれーとーちょこれーとー♪』

『主殿ならできる。信じているぞ。我の祝福をつけるか？』

「いや……この段階で何を加速させる気だ。オレに馬車馬（バシャウマ）のよーに働けとゆーのか」

妖精と精霊を巻きこんで、きゃあきゃあ笑い、歌いながら森を歩く。

持ったカゴには本日の上納ケーキが入っているので、スキップは

抑えて歩いている。
「ばーちゃん、いるかー？」
オレは扉に手をかけた。
瞬間、扉が爆発した！
とっさに防御魔法展開。目の前に壁を作る。破片が飛んでくるが、完璧にふせいだ。
呪文の詠唱短縮は、オレの研究テーマだ。防御系なら1．7秒で起動できる。
スィーツだけじゃないのだ！
「まだまだだね。こういう時は、完全に破裂する前につつんで敵に投げ返しな」
なくなった入口の向こう、薬を煮出しながら治療師が言った。
「包むってどうやるんだよ！　それよりばーちゃん、自分ち壊すな！」
そうなのだ。
爆発は敵ではなく、この老婆がやったのだ。
電撃だとオレが防いでしまうので、物足りなくなったのだろう。
「お前が直しな。アリアに手伝ってもらうんじゃないよ。――さ、アリアと間抜けな祝福たち。とっとと入っておいで。今日のケーキは何だい」
『マスターの新作なのよ。でも私、マヌケじゃないわ』
『しかも達とは無礼な。我は正当な祝福だ』

「果物ゼリーとブルーベリームース、っていうんだって」
どっちもゼラチンを使う。
ゼラチンの作り方は、牛や豚の骨皮を煮詰めてろ過、である。
村ではそんな大量の骨皮がでないので保留にしていたが、王都の肉屋で出たのを売ってもらった。
ただ、今のところ人手が足りないので販売の予定はナイ。
パティシエは村の子供たちだけで、作り方は門外不出となっている。
偵察に来るお抱え料理人だの都の商人だのは、元からいる間者に邪魔だと脅されるのか、あまり見ない。おかげで秘密は保たれている。
そして少し怖がられている。
そのうち一子相伝の噂が立つんじゃね？
「どれ」
鍋をかきまぜる作業をやめて味見をした老婆は、世にも恐ろしいシワだらけの満面の笑みを浮かべた。
「悪くないね。アタシが金を貸してやっただけはある」
治療師の老婆が言う通り、果物苗を買う資金と王都への飛行案内、出店保証金を彼女に頼った。
人嫌いのヘンクツ老婆だが、スィーツとワインを毎日上納すると言ったら釣れた。
なにせ引きこもりの大魔道師、報奨金なんて使わず残っている。

もちろんすぐに返すつもりだが、元警官としてはフクザツだ。

「今更だけど、ばーちゃんさ、オレがこのまま逃げたらどーすんの。気をつけろよ。いつの世も、こういう老人が詐欺にひっかかるんだぞ？」

「何言ってるんだかね。心配なんて百年早いよ。このアタシから逃げられると思えるなんて、バカで幸せなひよっこだ。いつの世も、こういう年長者を敬えない子供が痛い目みるのさ」

老婆はケケケと炎球（推定Ｌｖ１０）を手に嗤（わら）った。

……その通りデシタ。

魔法でも口で勝てないオレは、ムダな心配をやめて扉を直すことにした。

２９　マグナス第三の事件簿　１　（七歳）（後書き）

１／５、一部修正しました。神代ふみあき様、ご指摘ありがとうございました。
（しかもご指摘いただいたのに、最初にお名前を間違えてしまって済みませんでした！　以後気をつけます！！　久藤様に教えていただいてから気付いた、ダメ人間です（涙）。方々にご迷惑おかけしていますｏｒｚ）
１／１０、プランツハンターの記述を一部修正。

30　マグナス第三の事件簿　2　（七歳）

さて問題です。
扉を直すにはどうしたらいいでしょう。
普通の答えは、木の精霊（ドライアド）に扉用の木をもらう、だ。
でもオレは、粉々に飛び散った木片を集めて地味ーに接着を始めた。
だって森、さんざん開拓させてもらった。拒否はされなかったが、おかげで木の精霊には距離を置かれている。

『マスター、まだー？』
「文句言ってないで手伝ってくれ。あ、カトリー犬、なんで破片もって逃げる！　って掘るな隠すな！！」
『謎じゃないから、やる気なーい』
「うーわー！」

結局、二時間ほどジグソーパズル的な作業をやって、玄関は復元された。

でもできるなら、形状記憶の魔法がほしい。
またこんな事があると嫌だ。めんどくさい。

治療師の老婆は教えてくれないが、そういう魔法もたぶんある。
オレがやってる発動短縮だって、絶対誰かが研究して、きっともう終わってる。
老婆は自分で考えろと言うが、時間のムダだと思うんだが。

そんな事をしていたので、村に戻ったのは夕方の遅い時間だった。
村が奇妙にざわめいていた。
『マスター事件の匂いがするわ！』
レディ・ワトソンが羽ばたき飛びあがる。
『血の臭いもだ』
カトリー犬が鼻をひくつかせ、眉をひそめる。
こういう時、二人とも絶対間違わない。オレはアリアの手を引いて走った。
広場に人が集まり、さらに奥に男衆がいる。
その中に、見なれた背中を見つけた。
人をかき分けてシャツを引っ張る。
「にーちゃん、何があった！」
「父ちゃんと母ちゃんが……」
兄（ジョージ）はつぶやいたかと思うと、しゃがみ込んだ。オレをぎゅっと抱きしめ、背に顔を伏せる。
「殺された」
現実感が消えた。
音が素通りしてゆく。

妖精と精霊が大騒ぎしている。かわいそうにと誰かが言った。――それらすべてが、遠い。

「それから、ケイトがいない」

ねーちゃんが？

オレは兄の手を振り切って家へと急いだ。男たちの足元をすり抜け、暗い家の中へと入る。

いつもなら夕飯の支度がされてる時間なのに、火の気はなく、代わりにほのかな血臭。

寒村の常として、家には部屋二つしかない。

そのうち一つ、生活スペースに両親が寝かせられていた。

二人とも、首から横腹まで斜めに刀傷が一つ。腕や手にケガはない。正面から、抵抗のない状態で斬られている。

その傷は、組まれた手指の下になって半分くらい隠れている。村人は現場保存より死者の尊厳を重視し、二人はきちんと目を閉じ、仰向けにされていた。

『マスター……』

『主殿』

ぎゅうっと、左右から小さい者にしがみつかれた。

二人は一生懸命オレの頭を撫で、涙を拭おうと努力している。

……泣いてたのか、自分。

二人の行動で気付き、オレはそでで顔を拭いた。が、涙が止まらないので無意味。

被害者家族が大泣きするのに居合わせた事はあるが、自分がやる

とは思ってなかった。現場には慣れてるのに、体が子供だと泣けるんだなあ……。

呆然とそんな事を考えながら、オレは父に近寄った。
死後硬直した手に握られている布は、破られた黒い絹（シルク）。

「これ……」
いつの間にか後ろに立っていた兄が、オレの視線をたどって表情を固くした。

そしていきなりオレを小脇に抱えると、村長の前まで行って深々と頭を下げた。
「こんな事になって、悪い。迷惑をかける。でも頼む、コイツをかくまってくれ」

兄（ジョージ）がマジメなの、始めて見たな。
じゃなくて。

村長うなずくなよ！
オレを閉じ込めるのはやめろ――――っ！

31　マグナス第三の事件簿　3　（七歳）

「出せ――――っ！」

村長の家の一室に閉じ込められた。

さすが村一番なだけあって、品のいい内装だ。奥さんが家族のために、居心地よくしようと整えてるのがよく分かる。こんな状況じゃなければ、居座るね。いっそ住みたい。

何より魔法防御がかなりのものだった。

魔法解除できない。

『マスターがこれじゃ推理できないかも……。ここは私がやらなくちゃ』

レディ・ワトソンがパイプ片手に腕を組み、真剣な表情でぐるぐると空中を飛んでいる。

『妖精、問題ないのだ。いざとなったら我が一噛（ひとか）みしてやる。されば人間は目を輝かせ、泡を吹き倒れるまでガンバるのだ』

ソレ狂犬病！

精一杯の善意で訊くけど、それ、ドン底なオレを励ますための冗談？

いや、答えは聞きたくない。勝手にそう思っておく。

うっかり噛まれてはたまらないので、オレは顔をぬぐって言ってみた。

「大丈夫だ。――まず現状を整理な。あんな高級（シルク）品、村にはない。

オレを狙った間者か偵察部隊が、邪魔な両親を殺した。ねーちゃんはもしかすると人質。って、にーちゃんは考えてる」

でも、だからといって閉じ込めるなよ！

交渉でも実戦でも、絶対オレの方が得意だ。

なのにこれって、戦略的に間違ってるだろーが！

「大丈夫、私たちは村の子を守るわ。いま、森の治療師に助けを求めに行ってるから、大丈夫。あの方は強いもの」

村長の奥さん（御歳（おんとし）６２）がドア越しに話しかけるが、オレは聞いていなかった。

引き出しを開けて、中身をチェック。

『我もそう思うが、主殿は違う考えなのか？』

『マスターはこの私が見つけた、ナナメ４５度をいく探偵（フェアリープリンセス）だもの。違うにきまってるでしょう。でもこれで安心したわ』

『異端のくせに無礼な妖精だな！　ならお主には予想できるのか』

『……明日は雨ね』

『誰が天気予報しろと言った！！』

二匹が騒いでいる間に、室内漁りは終了。目的の物はみつからなかった。

さて、次の部屋だな。

どれだけ居心地のいい家でも、もったいなくても、この状況で関係ない。

魔法解除できないなら、いいよ壊すよ。

「ばーちゃん、どいてて！　――――カトリー犬は手ぇ出すな」

『つまらないのだ』

炎撃Ｌｖ１０。でも防御と相殺で威力はそこそこ。
扉は粉々に吹っ飛んだ。

床に座り込んで嘆く奥さん。
しかし嘆くのは、壊れたアンティーク扉に関してだ。自分のすぐ近くを直撃した攻撃はまったく気にしてない。

あのう。これでも、防御ナシ抵抗ナシの人間に当たったら重傷な攻撃なんデスが。逃げてくれませんか？
魔法耐性がいいのも善し悪しだ。

「ごめん、扉は後で直すから！　レディ・ワトソンは森を見て来てくれ」

『任せて！　私はレディ・ワトソン！』
妖精はインヴァネスコートをひるがえし、一目散に飛んでゆく。
事件が事件だけに、いつもより気合いが入っている。

もちろんオレはオレでやる事がある。
村長の家の部屋を、片っぱしから家探しするのだ。他の家より部屋も物も多いから大変だ。

そうこうしているうちに、奥さんが人を呼んできた。
「おい、お前！」
「マグナス、何やってんだ！」
オレは、慌てて走ってくる村人に捕まらないよう、ダッシュで逃げた。

逃げ込んだおじさんの家は普通で、二部屋しか屋探ししなくて済んだので楽だった。
「何してんだ！　こっちはお前のためを思ってやってんだぞ！」
「待てコラ！」
「伸すぞ！」

「あとで！」
だんだん柄の悪くなる男たちの手をすり抜け、また逃げた。

次に入った先は、アリアの家だ。

「何だい、いったいどうしたんだい」
駆け込むと、女衆に割り当てられた葬式の準備をしていたおばさんが、びっくりして顔を上げた。
「マグナス……大丈夫？」
アリアが心配して駆け寄ってくるが、視線で止める。

「ちょっと見せて」
家中の引き出しや壺をチェックしたが、ここも二部屋しかないので楽勝だ。

「マグナス！」
家探しを終えたところで、思い切り殴られた。あーったま痛えっ！
兄に首根っこをつかまれて、猫の子のようにつまみ上げられる。

「捕まえたぞっ！　お前何やってんだよ！　ちょっとはオレの心配を分かれよ！！」

「にーちゃんこそ何すんだ！　ねーちゃん助けたいなら手伝えよっ！」
『手を離せ無礼者！　主殿は、お主とは違う推理をしておるのだ！』
「……えーと、精霊様それって？」
困惑した兄の脇腹に仕返しの蹴りを入れ、オレは逃れた。
「森で見張ってるやつら、どんだけ本気で牽制し合ってると思ってんだよ。教会について来たのなんて、命がけだった。なのに、そんな様子がないなんておかしいだろ」
家は、ちゃんと家の形を保っていた。
攻撃ついでに懺悔室をぶっ壊し、互いを殺し合い、逮捕されるくらいなら死ぬ覚悟の間者が、同業者にただ姉を連れて行かせるか？
「あー……分からん」
追いかけてきた勢いを失い、村人たちは顔を見合わせている。
「つまり、犯人は内部の人間なんだよ」

32　マグナス第三の事件簿　4　（七歳）

両親が引き抜きを止めようと邪魔して殺されたなら、家が原形を保ってるのはおかしい。

プラス、姉（ケイト）を誘拐したのが間者なら、今頃森は同士討ちで大惨劇だ。

だが、大量の鳥が逃げ飛んでいったりしていない。

もしそうなら、帰ってくる途中でオレが気づいてる。

無害な商人でさえ追い払われてるのに、誰が森で騒ぎを起こさずに通れる？

村人なら、間者たちは気にしない。

例え犯行が行われても、殺されるのは弱者。彼らの雇い主は、弱者はいらない。

だから犯人は、間者の本気度を知らない村人である可能性が高い。

「でも、スパイが着ていそうな黒い服の切れ端が」

男たちの中から、誰かが言った。

「握ってた。だからオレ、家探ししてたんだ。村長、御者をしてくれたおじさん、それからヨシュアの家。新しい絹（シルク）を買えるのは、ここ数年のあいだに街に行った三人だけだから。ちなみに家にはないし、粗忽（そこつ）で単純すぎる兄ちゃんがオレに隠せるとも思わないから除外」

何度も言うが、うちの村は貧しいのである。

晴れ着でさえ綿。絹なんて持ってない。
街に行くのも、子供の洗礼のために5年に一度。

村人はまた、困ったように顔を見合わせた。
単純と言われて単純に怒っている兄はさておき、オレの言った事を理解したのだ。

「……村長・おじさん・ヨシュアの誰かの家で絹は見つかったのか？」

「見つかんない」
「なら」
ざわめく村人たちに、オレは首を振った。
「証拠は、レディ・ワトソンが見つけてくる。犯人はすぐに分かる」

実際そうだった。
『マスター、非常事態――っ！』
『遅いぞ、妖精』
『駄犬は黙ってて！　たいへんなの。見つけたんだけど埋まってるの！　早く来て！！』

プリンセスらしい優雅さもなく、レディ・ワトソンが高速で羽ばたいて戻って来た。

「スパイの服が見つかったのか？」
兄がボケをかますが、そんなで彼女が慌てるはずがない。
「ねーちゃんだよ！！」

オレは森へと走りだし、途端に木の根っこにつまづいて転んだ。
「〜〜〜〜ってえ」

『主殿、危ない！』

身を起こすと、目の前に別の木の根があった。

槍のように、鋭い勢い。

反射神経を総動員して逃げたが、またすぐに突き出される。ギリギリ、頬にかすった。

串刺しはヤだぞ！！

「カトリー犬！」

『了解なのだっ！』

「木精霊（ドライアド）に祈念申し上げるっ！」

オレの頭にしがみついた祝福（カトリーヌ）こみで呪文の冒頭を叫んだが、反応がなかった。

それどころか、木が丸々一本倒れてきた。

『きゃあああ、マスター！！』

下敷き寸前っ！　しかも追加で枝攻撃ってナニ！！

「ヨシュア、あんたなあっ！」

かろうじて風魔法で浮いて避け、村の垣根の中へ戻る。息を切らせながら怒鳴れば、村人が下がり、オレとヨシュアの間に空間ができた。

「なんでこんな事するんだよ！」

「木を見つけられたら、どうせ俺だってバレるから。今でも後でも一緒だ」

「ヨシュア！？」
兄が目を丸くしているが、彼は兄を見もしない。
森へとささやく――――。
森がざわめく――――。
まずい！
「精霊に祈念申し上げるっ！」
「無駄だ。オレの方が付き合いが長い。お前は木（ドライアド）を利用するだけだしな」

だが。
『ふんっ。お主こそ、本日最大級のムダムダムダムダァッ！　我が威力を思い知るのだ！』
頭上で、服の裾をなびかせた精霊が高笑いをした。

彼女が指をさすと同時に、　がばあっ　と地面がヨシュアをのみこんだ。

……ごくん。と音が聞こえたような気がした。いや、もちろん幻聴だが。

「おおおおおっ」
「さすが教会の祝福、とんでもねえ……」
左右に割れて固唾（かたず）をのんでいた村人がどよめいた。二歩ほど逃げた。

もちろん土魔法（メイン）はオレだが、まだＬｖ３の微弱。でもカトリー犬のおかげでダメージが行った。

「ありがとな」

『もちろんだとも。感謝は常に、絶賛受付中なのだ』
『マスター、何デレてるのっ！　お姉さんを助けるのが先です！』

確かに。
オレはレディ・ワトソンに案内されて、再度森へ入った。
木がヨシュアの味方でも、指示を出されなければ問題ナシ。後ろから兄たちもついてくる。

「この中よ！」

妖精がホバリングで指をさす。
ハッキリ言って、ただの大木にしか見えない。レディ・ワトソンが警察犬さながらの嗅覚（じつりょく）を発揮してくれなかったら、分からなかった。
なるほど。ここまで年代物のに語りかけられるのは、木地師として好かれているヨシュアくらいだ。

「分かった。カトリー犬、呪文を唱える間、祝福を繰り返してくれ」

オレは木の精霊にあまり好かれていない。【木への呼び掛け】が、祝福5倍がけになった時点で、ようやく木が動いた。
幹が開き、姉と、破られた黒絹の残りが落ちてくる。

「ケイト！」

兄が受け止めようと手を伸ばす。
その兄の胸を、木の枝が貫いた。

33　マグナス第三の事件簿　5　（七歳）

枝が引き抜かれ、鮮血が飛沫（しぶ）いた。

笑い声がした。

振り返ると、土だらけのヨシュアがいた。荒い息の下から途切れ途切れに笑っていた。

甘かった。根に掘り出されたか。

「……犯人は間者（スパイ）だって向かって行って、オレ達が殺されればいいって思ったのか。だから殺したとーちゃんに、絹握らせた？」

「大当たり。ケイトは後で助けるつもりだったさ。なのに、お前気づき過ぎ。本当に、敵に回したくない7歳児だ。でも、もういい。一番、死んで欲しいジョージを殺せたら、それでいいんだ」

「死んでないっ」

「君も意外にのんきだな？」

言い合う横で、赤毛のレオナルドが魔法糸で兄に止血してくれていた。

責めるような上から目線で見降ろされた。

「……」

だから氷魔法の応用で【仮死状態】をかけ、そのうえで風魔法で兄と姉を浮かせた。

あとは逃げるだけ。

でも我慢できなくて、ヨシュアを睨みつける。

「何でにーちゃんなんだよ！　仲良かったんじゃないのか！」
むかし射られた復讐だったら、さすがにキレるぞ！
「仲がいい？　俺がずっと我慢してたから、そう見えただけだろ。人の気も知らないで。知ろうともしないで！　何も考えないのに幸せなんて、こいつだけずるいじゃないか。父親もいて、ケイトは優しくて美人で、お前が何でも作ってくれて！　どんどん豊かになって！」
「だからって！」
「いい加減にしろ」
レオナルドにうんざりと言われた。
「話は後だ。行け。彼は僕が責任をもって捕まえておく。――蜘蛛（タラ）精霊（シテ）に祈念申し上げる！」
詠唱が終わるなり、魔法糸が大展開をした。
ヨシュアどころか、森の木を含めた辺り一帯を糸で固定する。
……こいつ、すごい。
オレは治癒を除いて全属性使えるけど、まんべんなく低レベル。
でもレオナルドは逆で、魔法糸だけ超絶ハイレベルだ。こんなの想像を超えてる。
ついてきた村人達も、とんでもない光景に腰を抜かしていた。
頭が冷えた。
これならヨシュアが暴れても、被害はない。
「……頼む」
今度こそオレは、兄と姉を連れて村へ走った。

走りながら、思う。

父は昔、弓の名手だった。ケガをして、今は畑仕事をしているが、村人に尊敬されていた。

兄は弓の練習に励んで、名手と言われるようになった。村人は、さすが父の子だと誉めた。

姉は、祭りで恋人に花冠を編んでやった。村人は仲良いことだと微笑んだ。

アリアはいつもオレにくっついていた。

ヨシュアはその間どうしていたんだろう。

ヨシュアの父はすでに亡くなっている。

村の暮らしは、男手の必要な時が多い。それを全部ひとりでやっていた。

ただでさえ貧しい村なのに、その中でも貧乏で。

オレは自分の事に忙しくて、ヨシュアがどうしていたのか全然気にとめなかった。

能天気でいつも幸せそうな兄のそばで、いつも、ずっと、我慢していた事。

彼が姉を好きだった事も。

気づいてたら、こうはならなかったのに。

感情ではまだ許せないが、でも犯罪抑止は警官の仕事だ。

かなり本気でへこむ。

でも、へこんで地面に埋まる前にやる事がある。

「レディ・ワトソン、うちの両親を殺した犯人はヨシュア。顔見知りで警戒しなかったところを、正面から斬りつけた。黒の絹は偽装工作。――願いは、今回の事件での死傷者すべての完全回復！」

村の広場、木のない場所まで走ったオレは叫んだ。

事件解決のたびに一つだけ願いを叶えてくれる妖精に。

だが、彼女はうつむいて首を振った。

『ごめんなさい、マスター。力が足りなくて、できないの』

なんだソレ。

なんで。

握った手が震えた。死者が蘇らないのは自明だが、自分が転生者で、魔法や精霊があふれる世界だったから、何とかなるんだとどこかで思ってた。なのに。

絶叫が漏れそうだった。

が、ガツンと杖で殴られた。

「〜〜〜〜〜っ！」

『あ、主殿、大丈夫か……？　今かなりイイ音がしたのだ』

「まったくバカな子だねえ。蘇生魔法が難しいのくらい、知っときな」

「……ばーちゃん」

村に残って寄り集まっていた女たちの間から、治療師の老婆が出

てきた。
「姉の方はまだ息があるね。大丈夫。だったら早く、兄の回復を願いな」
有無を言わさず指示された。
「……レディ・ワトソン。さっきのは取り消す。願いは、兄の回復」
『はいっ。ごめんなさいマスター』
指をならして願いを叶えた妖精は、逃げるようにして消えた。
氷魔法を解けば、村長が魔法糸を切ってくれた。
どこもケガのない兄が、不思議そうに起き上がる。女の子が抱きついて嬉し泣きをし始める。
「キャシー……？　あれ、ヨシュアは？」
ホント何にも考えない兄だな。
イラッとしたが、アリアが真っ青になっていたので蹴れなかった。
両手で彼女の耳を塞ぐ。
「森。行くなよ。また重傷させられたら、次は治せないんだから」
「じきにレオナルド達が連れてくるじゃろう。己で答えを出しているかもしれんがな」
自決、という意味だ。
聞こえなかったアリアの代わりに、母親が倒れた。
女たちが悲鳴を上げ、神に祈り始める。
「取り乱すんじゃないよ。ホラ、足持ちな。そっちのは、頭持って。

何もたもたしてるんだい。家に運ぶんだよ」
老婆が不機嫌に怒鳴り、ようやく介護に動き出した。

でも、できるのは安静に寝かせておくくらいだ。
ここに治癒魔法が使える者がいたら良かったのに。そしたら兄も……ヨシュアも治せたのに。

オレは、改めてそう思った。

３３　マグナス第三の事件簿　５　（七歳）（後書き）

１／１０、ここに書いてあった後書きを活動報告へ移動しました。
シャープシンペル　様、ありがとうございました。

３４　学校へ行きたい　１　（七歳）

両親の葬式が盛大に為され、終わった。

ヨシュアは結局自決し、おばさんも心労で寝込んだまま亡くなった。

彼の葬式は、許されなかった。教会は自殺者を受け入れない。アリアが一人で、森に埋葬した。

オレも手伝いたかったが、やんわりと拒否された。今彼女に対してできることは無いらしい。

そんな間も、喫茶店経営は順調だった。

春夏秋冬、季節ごとに品を変え、今では王室御用達である。

貴族や資産階級から年単位での注文も入り、村の子供の半数が商売に携わっている。

不安がる大人もいるが、間者や偵察部隊の“まず押さえておくポイント”はオレなので、微妙な折り合いがついていた（万が一を考えて、こっそりフォローもしてあるし）。

そうして貯めた金で、学校に行くことにした。

治癒魔法その他、治療師の老婆が使えない・教えない魔法を習いたいのだ。

ヨシュアが両親や姉にした事を思うと腹が立つ。夜中に飛び起きて激情を叫びたくなるくらいだ。

しかし、死んで終わりにしたのにはもっとムカつく。
おばちゃんやにーちゃん、アリアの事考えろよ！
三人は、絶対ヨシュアに死んでほしくなかったはずだ。
あの時オレに治癒魔法が使えたら、いろいろ違かったと思う。
もっと言えば、オレが家や人に対してセコムな魔法を使えていれば良かったんだ。予防できていた。
前から考えていたが、あれで完全に決心した。
学校に、行く。

というわけで、明日は王都で入学試験だ。

「生まれついての食い意地を満たすためだと思っていたが、実は人に言えない野望を秘めていたとは」
赤毛のレオナルドが、大真面目に言っている。ひどい言われようである。
「そんな迂遠（うえん）な方法をとらなくても、治療師に借りた金を学費にすれば楽だと思うが」
「学校に行くためって言ったら、貸してくれないって。ばーちゃん、オレが楽して魔法学ぶの嫌みたいでさ、いつも、自分で考えろーって」
「なるほどな。何にせよ、マグナスなら受かるに決まってる。そら、先に祝いの品をやろう」

新品の服を放られた。村の子供が普段着ている、フード付きのチュニックだ。

頭に乗った服を手にとれば、織り込まれた魔力を感じた。
って。

「……もしかしなくても、魔法糸か！？」

「魔法を使う点では、君の菓子と同じだろう。ナゼそんなに嫌そうな顔をする」

こっちは、ナゼお前が嫌じゃないのか不思議だよ！

「魔法糸ってクモの糸だよな！？」

『もっと正確には毒蜘蛛の糸なのだ』

「べたつかないよう工夫したぞ？」

そーゆー問題と違うっ。

思ったが、クモの糸で服を作るなんて気の長い作業をしてくれた気持ちに感謝し、受け取った。

受け取らなかったら、糸で簀巻(すま)きにされて湖に沈められそうな気がしたし。

「アリガトナ」

ココロがうっかり表出してカタコトになったが、握手を交わす。

「気にするな。これからは名実ともに僕が経営者だ。村の子供たちも熟練してきた事だし、容赦なく稼がせてもらう。まずは二号店」

くくく、とレオナルドは算盤を弾くマネをした。

ぎゃあ。労働基準法違反！

『主殿、ここに悪い人がいるのだ』
「ああ、いるな」
「むろん冗談だが、本気にしたのか。実にからかいやすい。さすがジョージの弟だ。高品質に加え、品薄だからこそ箔（プレミア）がつくという君の主張は、理解している」
レオナルドは実に楽しげに笑った。

ふ。ふふふ。
神様、一回こいつを埋めてもいいでしょうか。

「違うだろ！　お前のカオが本気だったんだよ！」
『主殿、悪い人は殺（や）ってしまうのだ』
「そう、殺って……」
口車に乗りかけ、我に返る。
肩に乗っている精霊が、しごく単純に、レオナルドへ歯を剥いてうなっていた。

「うわあ、信じるな！　こいつのは冗談だから。お前も殺される前に弁解しとけ！」
「ふむ。常に真面目に見えてしまう僕の罪だな。それより、こっちはアリア用だ。ムダに騒いでないで、渡しておいてくれ」
「スルーかよ！」

やがて、小さな荷物を手にしたアリアがやって来た。
「マグナス、待たせてごめんね。あの、あたし、言わなくちゃいけない事が……」
「アリア、やっと来たね！」
走ってきた彼女は、レオナルドを見つけて足をとめた。

「あ……。えと、レオは見送りに来てくれたんだね！」
離れた位置で、礼儀正しく頭を下げる。
あの事件から、彼女は人に遠慮するようになった。前ほど甘えてこない。
少し寂しいが、日常を取り繕えるだけマシだ。
「ああ」
赤毛の少年は、照れて視線を外した。魔法糸の服をアリアに突きつける。
「餞別（せんべつ）だ。お前も受かると思うから、持っていけ」
「ありがとう。わあ、キレイ！」
はしゃいだフリで広げた服は、フード付きのワンピースだった。しかもピンクに染色してあり、王都で流行しているゴシック調の刺繍が白糸で施されてある。
「……あきらかーにオレのより手が込んでるな」
「君もピンクにして欲しかったのか？　気持ちの悪い男だな」
「埋めるぞコラ！」
『よし。今度こそ殺るのだな、主殿』
「だからお前も覚えろよ――――――っ！」
ふざけてもり上げようとするオレ達に、アリアは、無理に笑顔を作っていた。
ひとしきり騒いだ後、オレはアリアと本日分の菓子をかついで空

へと舞った。
どうせ行先は同じ王都なのだからと納品を押しつけたのは、もちろんレオナルドだ。
畑や作業所、川や木の上から、仕事をやめて村人が手を振っている。
昨日まる一日かけて出征祝い（誤）をしてくれたので、今日は見送りはいいとオレが断ったのだ。
手を振り返したいところだが、あいにく両手が埋まっている。
代わりに応じていたアリアが、笑顔を消してつぶやいた。
「……あの、マグナス。あのね、ヨシュアの事なんだけど」
「あー……それ、後でいい。アリアが元に戻った時で。たぶん、言いたい事分かるから」
ちゃんと自分の中で消化してからで。
言わない部分も悟って、アリアは泣きそうにうなずいた。

３４　学校へ行きたい　１　（七歳）（後書き）

１／１０、ここにあった後書きを活動報告へ移動しました。シャープシンペル　様、ありがとうございました。

35　学校へ行きたい　2　（七歳）

「では、始め」

試験監督の合図とともに、受験生は羽ペンを持った。
羽ペンなんていう、使った事のない物を使う時点ですでにペナルティだが、常識問題を解こうと努力する。

現在の王の名前？　……忘れた。王家御用達の認定書に書いてあったんだが。無記入よりはノダメか？

この国の建国の歴史？　魔人の奴隷となっていたヒトが勇者に率いられて、６日間の反乱の末に勝利した……のは安息日か。えーと神様と勇者と大魔道師が……どうした？？？　パス。

最新の侵略戦争の名称。これは分かる。カルカス戦役。ばーちゃんが美女だった。

７大選定候の家名？　……ナニソレ。

分からないのが多いので、常識問題はすっ飛ばした。
いいんだよ分からなくても。だってオレ７歳児だもんな。現代なら、七五三で写真撮ってる時代だよ、うん。

都合のいいときだけ子供になりつつ、計算問題を解く。
小中学校レベルなので、何とかなった。
１コだけあった高校レベルの問題は確率で、なんと警官採用試験

でやったのと一緒！　スゲー懐かしい！　ナミダ出そう！

問題に感動している間に、筆記試験は終わった。

アリアを振り向いたら笑顔を向けられたので、あっちも手ごたえがあったのだろう。

「では、続いて実技試験を行う。魔法学科選択の諸君は、校庭に出て待機するように」

答案用紙を回収した監督官が、窓の外を指差した。

この学校は、良家の子弟が修身箔付け（ステータスきょうか）のために預けられる学校とは違う。

手に職をつけるため、紹介状を書いてもらうために労働者階級の子供が行くのとも違う。

国の軍事を担う人材を育てる、いわば防衛大学である。

オレの将来のユメは町のお巡りさんであり、防衛は範囲外なのだが、一人にすべての魔法を教えてくれる場所がここしかなかった。

そもそも、一人が使える魔法は1コか2コ。

だから普通は、すべてを教わる必要がない。

しかし軍人は自分が使えるかではなく、敵が何系統の魔法で攻めてくるか、特徴と欠点を熟知しなければならない。かかっているのは国益と生死だから、授業もシビアに教えるのだ。

オレとしては望むところだ。ガチで来い。

「では、１０班に分ける。呼ばれた順に各列に並ぶこと」
外で待っていた試験監督が、よく通る声で告げた。

「事前に申告してもらった、諸君の得意魔法で分けた。１から４班までは攻撃魔法、５から７は防御魔法、８が幻影その他の補助魔法で、残りが治癒だ。それぞれ内容が違うので、班の監督官に従うように。では、移動始め！」

『アリアは防御グループなのだな。我はお主の力が防御とは思わぬが、不利な状況でも頑張るのだぞ。主殿が許可すれば手伝いにゆくので、気を強く持つように』
「カトリーヌちゃん、ありがとう。行ってくるね」

犬耳精霊とアリアが別れを惜しむ様子はメルヘンで、受験生の７割を占める男どもの注目の的だった。

さて。
手を振るカトリー犬を肩に乗せ、オレも移動しよう。

「この班の試験は簡単だ。魔法生物に向かって攻撃する。それだけだ」
区分は攻撃魔法グループ。
全体を仕切っていた監督官が、班の担当だった。
監督官は校庭に浮かんでいる球を示す。
黒ペンで目が書いてあるが、一目で落書きと分かる、ただのボールである。

『楽勝なのだ』
「だよな！　精霊いい事言うぜ。受験番号一番ヒダマリ・タマリ行くぜえっ！」

陽だまり？
日本語かと思ったら、肌の黒い（オレの感覚で言うなら）中東系の女だった。
１８歳くらいで、やたらガタイがいい。タンクトップと迷彩ズボンに似た服装は、女性はドレスが一般的なこの辺では見ない格好だ。健康的にエロい姐さんである。

どがんと衝撃音と土煙があがった。
だが丸い魔法生物には当たっていない。ソレは、斜め上にふよふよと浮かんでいる。

「このっ、逃げんな――――っ！」
『おお、凄いのだ。ファイトなのだ！』
無邪気に応援され、ヒダマリは、連続二十発の氷撃をつぎつぎ放った。

うーん体力勝負。なんか署の先輩を思い出す。

しかし砂埃がハンパなく立ち昇るなか、
「終了だ。次」
監督官が無慈悲に打ち切った。

「『ええーっ』」
カトリー犬とヒダマリのブーイング。

すべて見切って逃げ切った魔法生物は、ふよ？　と首をかしげていた。

35　学校へ行きたい　2　（七歳）（後書き）

1／11、誤字修正しました。

36　学校に行きたい　3　（七歳）

試験は問題なく進行し、誰の攻撃も当たらないままオレの番になった。

「受験番号102番、マグナス・デ・エルドハムです」

試験だから丁寧語。監督官と丸い魔法生物に、びしりと敬礼する。

監督官は7歳児の敬礼に目を見張ったが、動揺を隠して返礼。

球は横回転（まほうせいぶつ）で一回転してみせた。

「質問があります。教会洗礼でいただいた祝福は使ってかまわないでしょうか。筆記の時は却下されましたが」

『許可してほしい。我も参加したいのだ』

カトリー犬もオレのマネをして敬礼している。

「その肩の精霊か。筆記でそれを使ったら、カンニングし放題だからな。だが、実技は関係ない。祝福込みで、君の実力と認める」

さすがにここの教師たちは精霊が見えている。

当然と言えば当然だが、この分だとレディ・ワトソンも見えるかもしれない。

異端な憑きモノがバレたら、不合格？

『主殿はたまにオロカなのだ。合否以前に火あぶりなのだ』

耳元でささやかれた。う。そうだった。

だが、へこんでる場合じゃない。目先の事に集中しよう。試験試験。

「ありがとうございます。――カトリー犬？」
『うむ。了解なのだ！　アレの分まで頑張るのだ！』
精霊はやる気ＭＡＸで尻尾を振った。飛び跳ねる。

彼女の準備運動が終わり、
「そこだっ！」

オレが指さした瞬間、魔法生物の周囲で大爆発が起こった。

よし、成功！
ふははは。神業的に素早くても、逃げる暇なく周囲ごと燃えたら、当たってなくても問題なーし！

やったぜ合格、と気を良くしていたら、受験生だけでなく他の班の監督官さえ振り返っていた。

「な、なんだあっ！？」
「スティーブ先生のところで暴発だと？」
全員、結界の中で渦巻き燃え盛る炎に、度肝を抜かれてる。

何そのリアクション。
……もしかしなくても、やり過ぎた？

『見たか、我が主殿の小細工を！』
ヘタレの本性が出てビクビクし出したオレの気も知らず、精霊が高らかに笑い上げた。

「小細工ってゆーな！」
捕まえて手の中に閉じ込めておこうと思ったが、飛んで逃げられ

た。
お前な、試験に落ちたらどうするんだ！
『だが、あらかじめ我に速度増幅を頼んでいたのだ。これを小細工と言わずして何という』
「作戦でいいだろ、普通に！」
使ったのは、スィーツ開発と共にライフワークな研究成果・短縮型の発動呪文。しかも祝福効果で、ほとんど一瞬で発動させた。実戦でも使えんじゃね、コレ？　ってくらい実用的だ。
使用設定は、炎撃。
老婆が、森に落ちていた死体を焼却した高レベル魔法。
オレが知ってる唯一のハイレベル魔法でもある。
この数年で、森の治療師がオレの前で使った魔法はすべて習得した。
が、あの老婆はコピーを恐れて、他のハイレベルな術を使ってくれないのだ。
やってくれれば雷撃Ｌｖ１０でも覚えられると思うのに。
魔法は、初めの一文以外はまったく違う呪文だが、テラトリス語を覚えるより楽勝だ。
ホント、ここの言葉には苦労した。
単語に性別があるってどーゆー事！？　なんでコップが男か女か中性か考えなくちゃなんねーの！？
しかも「行軍縦隊」までおネエだった。……マジありえねえ。
日本語ベースの脳みそで、オレがどれだけ苦労したと思ってる。

それに比べたら、呪文暗記の方が全然マシ。
なぜなら、呪文は日本語文法だ！　神様ありがとう。
しかも精霊（ちから）の動き方も見える分、聞き取りオンリーより理解も楽。
もっとも、そうやってすぐに覚えるから、治療師はオレに魔法を教えるのを躊躇するんだろう。
誰が7歳児に、手榴弾やロケットランチャーを無制限に与える？
でも普通の7歳児じゃないオレは、与えてもらえないなら自分で取りに行くのだ。
少年よ、大志を抱け。
きっとアームストロング少佐も誉めてくれる事だろう（誤）。

「魔法生物が焼消（きえ）たか。ふむ。君の試験は終了だ。むこうで他の者と休んで居たまえ。次の受験者はそこで待機」
監督官が詠唱を始めると、新たな球形魔法生物がモヤモヤと宙に作られる。
お、完全に新種の魔法だ。
精霊が一匹も動かない。
珍しいのでじーっと観察していると、「即刻退去を命じる」と冷たい口調で注意された。
ケチだ。
魔法をキャンセルしてまで追い払わなくてもいいのに。
悪用しないのに。興味あっただけなのに。

この試験管は、森の治療師よりもさらに用心深い。

仕方ないので終わった受験者たちと合流したら……やたら避けられた。

やっぱやり過ぎ？

３６　学校に行きたい　３　（七歳）（後書き）

青ピ的な何か　様よりのご指摘を反映させてみました。ありがとうございました。
その結果、今まで出てきた魔法関係のふりがなを全部消すことに。
あと、１８話・街の教会６に『くしゃみ』を入れました。何度か言われていたのは、こういう事かも。ニブくてすみません。

３７　学校に行きたい　４　（七歳）（前書き）

いつの間にか総合ＰＶが８０万越え、ユニークが９万越え……。
読んでくださっている皆様、ありがとうございます！
書き始めた頃は、こんなに多くの方に読んでいただけるとは思っていませんでした。

37　学校に行きたい　4　（七歳）

がっくり下げ気分で体育座わりしていると、陽だまり・タマリが豪快に背中を叩いてきた。

うわあ。分厚い唇がエロ怖いんですけど！

ヘタレなオレは早くも逃げ腰だが、ヒダマリは全く気にしていなかった。

「よう。お前おもしれえな。精霊も」

『名はカトリー犬と申すのだ』

肩の上で両手を腰にあて、胸を張る犬耳精霊。白い尻尾がふさふさ揺れている。

「へえ。名前持ちの精霊って初めてだ。カトリーヌ、従属させられんの嫌じゃねーの？」

『問題ない。ここでは語れない、ふかーい絆（ゆらい）があるのだ』

……物おじしない精霊は、絆と書いて由来と読みやがった。

異端な妖精と張りあっただけなのに、ビミョーに詩的な表現もってきたな。

「信頼ってヤツだな。いいな、そういうの！」

ヒダマリ姐さんは、大雑把に笑い、疑いもせずに隣に座った。

体育会系すぎて暑苦しいが、善意な人間らしい。

「羨ましいぜ。ワタシの祝福なんて、金属加工だぞ？　魔法使いに剣作れってのかよ。使えねーったら」

……は？　今何て言った！？

「いや、全然つかえるだろ！」

オレはヒダマリの手を握った。

むしろ受験に落ちたら、喫茶店に就職してくれ！　キミのために新しく店を作るヨ！

スベル落ちるが禁句だから言わないが、本気でスカウトしたい。

だって、缶詰つくれるじゃないか！！

魔法でやると、溶接はともかく、金属を丸めるのが難しい。

オレが器用じゃないってのもあると思うが、途中で投げ出したくなるくらいだ。

一個作ってみたものの、缶切りも作るのかと想像した時点で嫌になったね。

もういい、開けるのは金槌とのみでガンガンやろう。

そんな感じで諦めていたのに、缶詰　（しかもプルトップ）！

甘い物はけっこう満たされた。

だから次。

オレはツナ缶が食いたいんだ――――っ！（↑瓶詰だと持ち運びの際割れるから却下）

「頼みがあるんだけど！」
「な、なんだイキナリ」
期待に目を輝かせヒダマリににじり寄ったら、カトリー犬に髪を引っ張られた。
ツナ缶ドリームの邪魔すんなー。
と振り返った視線の先には。
『主殿、たいへんなのだ！！』
「……うん、たいへんだ」
やたらでかい岩人形が、体育館へ向かって歩いていた。
ＳＦＸな光景だ。それともＡＲＡＳＨＩ主演の怪物君映画？
悲鳴が上がる。
岩人形の足元に受験生たちが固まっていて、その中には――――
アリアもいる！
やらかしてしまった受験生はあわてて制御しようとするが、岩人形はきかない。
オレは慌てて走り出し、『主殿っ！』カトリー犬にもう一度髪を引っ張られて我に返った。
そうだ。先に土魔法を放つべきだ。遠くても、威力が小さくても、走るよりマシだ。
「おい、焦んな！」
追いかけてきたヒダマリにまで止められた。
そうだよ、落ち着けオレ！

監督官たちはもっと早く、魔法で止めようとしていたが、一番に詠唱を終えたのはアリアだった。

岩人形が、動きを止めた。

「全員無事です。大丈夫っ！」

「だとしても、放っておけるか！」

言ったのは、オレじゃない。

何を思ったのか、体育館から飛び出してきた銀髪の少年が、岩人形に斬りつけた。

一撃必殺。

……って、待てよ！！

思ったが、遅かった。

術の要を斬り砕かれ、粉々に崩れる――――約ビル三階分の砂！

「『アリア！！』」

ヒダマリが連続攻撃した、何倍もの砂ぼこりだった。

苦しげに咳き込む音、結界から這い出そうとする者。一足先に逃げ出た受験者は、口に入った砂を出そうと水道を探し回っている。

『視界がきかぬのか。我が先導して来る！　主殿はここに居るのだ。よいな』

果敢にカトリー犬が結界へ突っ込んでゆく。

そんな中。

「ローガン・エト・カーリバング！　今は試験だ。怪物退治も魔法消しも、いい加減にしたまえ！！」

堪忍袋の緒が切れたっぽい怒声が聞こえた。

38　番外・教師視点

この学校は、武術科と魔法科の二つのコースがある。
それぞれの科ごとに採点を終えた教師たちは、合同で最終報告を行っていた。

ちなみに茶菓子がテーブルに乗っており、誰が何を食べるかで少しばかり揉めた。

何しろ茶菓子は王家御用達の絶品ケーキで、並ばずには買えないレア物だ。
一度も表に出てきた事のない店主は、たとえ貴族でも横入りは許さないガンコ職人という噂で、貯めた小銭を握った労働者のこどもから権力者まで、平等に列を作らなければ売ってくれない。

しかも昼には売り切れるので、入手自体難しいのだ。

王都ではかつて、『謎の店主の正体を探る！』という企画が組まれたが、誰もつきとめる事はできなかった。

当時の冒険者は語る。
「人間業とは思えない飛行を、必死で追いかけたんだ。なのに途中で、森から一級攻撃があって撃墜された。一級だぞ、一級。信じられるか？　絶対、あの森の向こうには秘密研究機関がある。ケーキとは、国民をダラクさせるために開発された兵器だ！」と。

アホすぎるので一笑に伏されたが、厳重な警備は、調査に向かった全員が証言している。中には戻らない者もいて、もはや都市伝説だ。

「ワシにそのイチゴショートをくれ」
「えー、武術教師が太っちゃ駄目ですよー。マカロンあげますからー」
「メイドが来たぞ。紅茶の者は手を上げよ」

とても国防を担う学校の教師とは思えない会話が、楽しげに続く。

5分経ち、ひとり我慢していた教師が咳ばらいをした。
「そろそろ始めさせてもらう」

「そうしましょう。私も結果を聞くのが楽しみなんです。今回は変わり種が多かったようですねえ」
最奥の席に座った校長が言うと、いかにも武人な体格の教師が手を上げた。

「ローガン・エト・カーリバングがご迷惑をおかけしたこと、謝罪する」

教師たちはみな苦笑を浮かべた。
武人の口髭にクリームがついていたからではナイ。

暴走はしたし口は悪かったが、銀髪の少年の行動は、まだ笑える範囲だ。

「騎士の家系、勇者認定試験を逃げだしたカーリバング家の子供だろ。見てたが、活きが良かったなあ。あれ、合格だろ」
「無論」

「あの年で魔法を斬るなど、並みの腕ではない。謝罪するのはこちらだ。こちらが先に迷惑をかけた」
魔法科の教師スティーブが厳しい表情で、テーブルを指で叩いた。
本来なら岩人形の暴走は、魔法科で押さえるべきだったのだ。

「子供が止めたと聞きましたよう」
「アリア・デ・エルドハム。大魔道師を排出する村エルドハムの出身だ。見た事のない魔法を使った」

音をたてないようにしているが、スティーブの指の動きはイライラしている。

「それはびっくりですねえ。選定候の一、魔法のキャヴェンディッシュ家のスティーブ先生でさえ知らないとは」

校長に言われ、教師は唇をかんだ。
相手に悪気がないのは分かるが、頭に血がのぼる。
テーブルを叩いていた指が、強く握りしめられた。

魔法の気配が濃くなった。

そんな中、ひらひらと手が上がった。
簡素なドレス姿の女教師だ。

「はいはーい。マグナス・デ・エルドハムも凄かったですよー。魔法生物が消し炭ですよ、消し炭。事故起こんないように結界張ってあったんで、炎撃が圧縮されて爆発しちゃったんですよねえー。さすが大魔道師の弟子。しかも使える魔法は炎の他に、雷、水、氷、風、土」

「なんだと！？」

体育館で試験をしていたために知らなかった武術科の教師たちがざわめき、――魔法の濃い気配が消えた。

「まあ、そっちは低レベルって申告がありましたけどー」

「教師エリセス、そのしゃべり方はやめてくれないか。いつもに増して聞き苦しい」

無意識に発していた緊迫感を流し去ったスティーブが、いつの間にか抜き去られていた受験申込書と採点結果を、エリセスから奪い返した。

「失礼した。加えて、使えるが苦手なものとして、精霊魔法全般」

ほとんど全（すべ）てである。戦力としての可能性に、武術側教師は息をのんだ。

「完全に、カルカス戦役の大魔道師と同じ傾向だ」

「入学動機は、聖魔法その他を習う事」

「大魔道師さえ超える気か！？　恐れ知らずな」

「あははー。あの自衛意識の強い村から出てきた時点で、変わり者ですよー。しかも筆記試験が笑えるくらい常識ナシで。1月6日は何の日か、の答えが、ナナクサガユの前日ー」

「意味わかんねえ。サービス問題だろソレ。勇者の日を知らないヤツいるのか」

「しかし計算問題は全問正解だ。しかも王立学院なみの式を使って」

「はあ？」

「恐れ知らずで変わり者の常識ナシですか。人外魔境ですねえ。面白い。もちろん合格でしょう？　子供でも、入学したら平等に扱ってあげて下さいねえ」

「はーい。あとはー、変わり種としてはヒダマリ・タマリでしょうかー。受験して来るとは驚きですー」

「筆記は満点、実技は７１点。合格ラインにあるが、校長の判断は？」

「おや、スティーブ先生。試験で合格なら、合格でしょう。差別はいけませんよう」

以降、菓子を堪能（たんのう）しながらの会議の内容は、平均点の発表や回答の傾向などへと移っていった……。

38　番外・教師視点（後書き）

エルドハムの周りの森は、かなり広いという設定で。いっそ樹海希望。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2046z/

これはテンプレですか？　いいえ、銀のプレートメイル略して銀プレです

2012年1月14日11時19分発行